渋公鴻南遺稿

205174-000-5

特22-782

渋谷鴻南遺稿

渋谷　鵜南／著

M34

EDV-0196

五十嵐力

亡友澁谷瀏君之
記念として
帝國圖書館に寄附す
明治三十四年六月八日
五十嵐力

亡友澁谷瀏君之
記念として
帝國圖書館に寄附す
明治三十四年六月八日
五十嵐力

特22
982

湖谷鴻南遺稿

五十嵐力寄贈本

次

一 肖像
一 略歷
一 俳句……一
一 和歌……二六
一 新體詩……二九
一 漢詩……四四
一 漫錄……五二
一 日記……九六
一 書翰及追悼文……一〇三

以上

頁

民藝・一〇・六・四三

澁谷瀏君の略歴

明治六年　一月十六日埼玉縣北葛飾郡彦成村に生る幼名を龜吉といふ本姓い鈴木氏父名は源治郎母はゞチ兄五人あり君は第六男也後叔母澁谷氏の姓を襲ふ

同十三年　鄉の小學校に入學す

同二十年　六月高等小學第四級を卒業す

同　年　四月東京神田藥學校に入學す性に適せず一年ならずして退學す

尙此の間下谷區練塀町增田某氏よつきて漢籍詩文を學ぶ

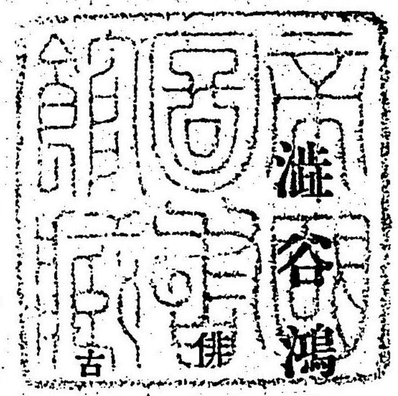
同二十一年　一月神田英語學校に入學す同廿四年卒業

同二十五年　一月慶應義塾よ入學す在學四十日餘にして退校す

同　年三月　早稻田東京專門學校に入學し同年七月專修英語科を卒業し直ちに文學科に入る

同二十八年　七月東京專門學校文學科を卒業す

同三十一年　四月四日肺を病みて喀血し同三十二年六月廿一日芝北里養生園に滯く享年二十七



澁谷鴻桐遺稿

俳句

房州館山にて

往今來白浪わさり〳〵哉

古鹿野山下にて

月一つ三州のながめ哉

秋立つや船べりを打つ浪の音

箒木の葉をふるひけり秋の雨

秋雨や蜩一つ暮を啼く

月一つ吹殘したる野分哉

淡雪や麥の育未だ一二寸

花の雨紀の貫之は見せばやな

玉椿花束みて稚兒通る

天地の心靜かや今日の雪　二

鷄の鳴聲白し今朝の雪

桃一村鷄の聲微かなり

病中

藥呑んで吾は五月の節句哉

天地悠々

花一瓣月一輪とおしなへあり春と秋

百金買駿馬千金買美人云云(詩)之れを大然に

求むれば

花開き鳥啼いて山の靜かなる

裏の戸よ蚯蚓の唄ふ旦かな

若し之れを人間に尋ねんか

眠る兒の行末かたる男女かな

日の影の小樣ゐ長き欠伸哉

更に之を天然と人との調和の上に探らんか

ふと見れば向ふに青し春の山

我あとを胡蝶も追うて花の影

試に之を詩人宗教家の方寸に問はんか

觀念の膝を埋めて落花哉

會釋してさつと紅さす小耳哉

○

若後家が雨の小窓を猫の戀

○

風召さな冬の夜寒し妹が文

冬の月芋買うて戻る下宿哉

冬の日の井桁よ落ちて時雨けり

○

血に啼て暗に迷ふのはとゝぎす　三

我病んで壁と相對す花の春

世い春の盛りを病める男かな

庭先の桃も見られぬ病かな

○

梅散て桃咲てあゝ三日の櫻かな

蝶よ來てわが前に舞へ病める窓

頭擧げて小窓を覗く櫻哉

寐ぬ窓に小雨ふる夜の蛙哉

眠飽いて聽盡したり雨の音

我さめて思ふ時君や夢まどか

○

抹香のきや羅に押さるゝ櫻かな

○

花七日嵐に三日過ぎあけり

行く春を嵐に送る病かな

嵐三日一年の春すさみけり

○

土曜日や書生酒買ふおぼろ月

蹕より春は浮かるゝ小兒かな

春の夜の只面白き笑ひ聲

○

花に病んで梅の實青うなりにけり

斷紅踈綠春は名殘の景色哉

暇のみ櫻は過ぎて牡丹哉

竹雪の便りなきを訝りて

牡丹咲て我病ひに君の便りなし

書狀のはしに

永き日を浮世の外の噺しせん

人生の莊重なるを思うて

かりそめの笑みにも浮ぶ涙かな

○

春雨や捲くに懶し妹が文

○

堂守の煙管咿へし日永かな

菜の花のつきて橋あり小家あり

○

牡丹餅を食うて彼岸とありにけり

三十一年五月九日汽船に靈岸島に乗りて房州に向へる途中

小蒸氣の羽根田が沖に霧みけり

白帆一つ太武が崎を外づれ鬼蛸壺のいくつ轉ろげし浮洲哉

○

つくばねて牛坐眠るや虻の聲

乳牛よ筆くはれて春ゆきぬ

麥とんぼ瓦蜻蛉の日和かな

蛙十句の中

旅よ居てたびとも知らぬ蛙哉

行く春を蛙と共よ泣きにけり

諸かわづ涙の調子を緩めけり

天地の頌歌や唱ふ諸蛙

白帆

先づ涼し白帆に明くる濱の夏

魚飛んで波に碎けし白帆哉

真帆ゝ不二片帆淺間を隱しけり

起つ涙に上りて消ねし白帆哉

浮世白帆ゆくゑ聞きたし雲と水

夏季兼題　開化品詠込

入る月に子規きく明けの汽車
有明のランプの上やほと〻ぎす
青嵐碓氷を登る滝車の窓

○

柘榴つぼみ紫陽花開く小庭哉
紫陽花や佗しき我を花に咲く
これも花青葉が中の柘榴かな

夏季兼題　文房具詠込

田草とり笠い象牙の文箱哉
筆もがな歌もがな哀れ不二詣

兼題判課題

京　便り　都　踊　の　噂　哉
米取れて今日は旦那が踊かな

夏痩の毛臑にしるき角力哉
聞く名より袞哀れや女郎花
女郎花三日月よどむ流れ哉
蜩や人おづかしき山の旅

○

夏痩や欄干に凭る月の顔

○

薄月の釣瓶の上や蜻蛉飛ぶ
しよろ〳〵と秋まづ哀れ落し水
秋立や小鍛冶が軒の槌の音
よべの嵐知らす顔なり今日の月

竹雪子が寄せし上五文字を取りて

我宿は芋田樂の月見かな
わき妹子は老いわし親いけふの月

名月や我れ無爲にして猶客遊す

○

三味の音の鐘に消されつ浦の秋

○

一人ぬるは我のみならで蜻蛉もか

時雨

時雨るゝや行くゑ法師か橋の上

時雨るゝや只岑閑として七大寺

時雨れけり兀然として僧と山

時雨るゝや木綿くる妹が小窓まで

○

きり〳〵すわれも寒かろ浦さゞれ

なせ啼かぬ朝啼くやうに夕鳥

芋買うて君と語らん秋の雨

前田二枝女史の寫眞見するをいとひければ

聲ばかり姿も見せよはとゝぎす

永夜閑吟

淋しとよ我は泣かぬぞ秋の暮

何のそれ我も男ぞ秋の風

寒いぞや三千年の秋の風

思ひだしたやうに虫鳴く夜永かな

虫の音もしばし途絶ゆる夜永かな

夜永かな虫一としきり一としきり

長夜夢さめて我れ其まゝ佛哉

おの夜永を眠り飽かずといふ人の言を思出して

君が夢我が現やちらぞ長き秋の夜

夢一つ見ぬとよ君がおの夜永

○

誰ぞさめしつれなきものよ秋の風

○

行く秋の名殘とゞめよ涙の音
せのれては更に狂はん早瀬かな

○

行く秋を更に時雨の旅寐かな
親しまん灯に我影の時雨けり
或人へ
思おき窓にもさはれ小夜時雨
十三夜の月の雲のたゞずまゐ怪しくいかゞと思はれて
待ちわびし影よく見せよけふの月
行秋を芋名月の別れかな

○

洗水瘦せて水車がさりでとり哉
醵金して芋買ふ暮の下宿かな
看護婦の白衣さやけき夜寒かな

○

花に寐て月にも起きず年暮れぬ
うき身には聞くにもさんざ時雨かな
爪琴や見ぬこひつくる小柴垣
白蒲團かつげば雪れ東山
寐て壁に對す男やえせ達磨
さま〳〵の憂きも集めて年の暮
驢よ尾する似而非智もうせて寒の蠅

○

梟の縮緬着て奉公と啼くとかや
霜よ雪よいちめよたんと寒の梅

雪

ふるはくゝあしたの待たるゝ夜の雪

樗焚て春の哨や雪の門

いでや聞け物語せん夜の雪

雪の夜や語り手とありし越の人

香炷て降る音きかん夜の雪

天地の定三昧や夜の雪

松原よ提灯ちらり夜のゆき

ふつたりな降つたる雪を我病みぬ

樗下げて風流い寒き雪見かな

散る程の葉は皆散りて冬木立

雪舟が墨繪やけさの霜野原

○

鶏の音の暮る晦日もなかりけり

今聞くも神代のまゝよ鶏の聲

霜ふかみ撞く手や氷る鐘低し

曉の寒さ撞出すかねの聲

淨穢不二氷の月や手水鉢

氷りしよ月に曙やく手水鉢

元日の句の募に應じて

元日やこれも浮世の日數やら

病中元旦

太箸よ我手憐む雜煮かな

○

盆梅の枕に泌る匂かな

山里の樗火よ更くる欠伸かな

元ふのれの隣りに居りし人の病俄かよ革りてゆ

ふべまだ宵淺き頃亡き人の數よ入りぬと聞きて

梅咲く日佛となりし人あはれ

ひねもす袖の中に在れど寒しとも覺えず。まどろめば永き夜のさびしさ一入。やくおき電燈の光よまぢ〳〵と明さんことの除りに口惜しければ自ら題を課して、思を練らんとれもひ立ちぬ手初めに寒の句を物ず（卅二年一月十五日夜）

尾酒屋のともし賑ふ寒さかな

夜廻の拍子木寒し透間風

お田賃る辻行燈の寒さかな

振向て人を見送る寒さかな

若き身の懐爐親しむ寒さかな

氷

水仙のたわみしまゝに氷りけり

イめば人影氷る辻の霜

灰白う涙の氷る火鉢哉

凍十句の中

けふの霜月よ凍えて死ぬ人あらん

冴

月冴にて長汀曲浦雪を捲く

寒十一句の中

寒き夜の小便氷る話かな

世よ售ちず温袍一貫の寒さ哉

知己なくて酒徒と交る寒さ哉

鉄漿つけつ良人を思ふ夜ぞ寒き

鐘

夢の世や三緑山の鐘をきく

月落ちた暁よ飯たけ明の鐘

雪

昨夜十二時頃よりふり出でしなりといふ。初雪の珍らしくも深くふりたるに、起き出でて見れば一望限りなき白妙に恰見朝來滿山白、不知昨夜打窓聲の詩句を想起して何やら嬉しきやうな心地とるゝ我心の幼なければよや。即景の吟をなす

江東の高士訪はばやけさの雪
丸窓の灯影うつくし夜の雪
土手の雪風流と粹ゝ寒き哉
雪の日や人の子の今も樽拾ひ

○

狗の兒の夜寒に啼くや雪の風
雪霽れて星やあぼれん空れ色
ねぼろ夜の煩惱はなし冬の月

我ど月廊宴として相對を
白う置く朝の霜の日影もろともあへなくなりし
人あんど聞き俄に募れる寒さの一入身よしむ心
地して

雪醸す寒さつれなく逝ける人
尚失せにし人の故郷には妻子もありと聞きて、や
くあき一人者こそ逝くべきをと憐もいや增して
妻子なき身よつらかれよ雪の風

○

小雨してそゞろ心や春の夜
妻を去り知己を捨て第二の故郷をも見捨てんと
する友の方へ
切れ凧のゆくへこへ落つるぞ春の風
愛妻を失ひて更に慈父とうしなひたる友の方へ

散る花の恨もしかず松の折

妻も迎へず家も成さず只病んで老いたる親を苦しむる已れみづからへ

野分して香もなき霜の黄菊哉

○

餘寒猶は料峭と書く春の文

梅一輪わづかよ春の景色哉

手十二何の中

両手して撈ふ目高や春の水

手を擧げて招けば霞む答かな

栢手の頻りにひゝく社日かな

曉夜の白き手と手と招きけり

大佛の手に散りかゝる櫻かな

老の春強弓を曳きし掌手獣す

足

思ふさま足伸べて寐るや春の雨

春雨や三味習ふ子のしびれ足

立ち盡くす誰が足跡や柳蔭

足跡よ飯だお籠る汐干のあ

昨日しの雪ふりてけふいひとよく晴れぬ。折から人より紅梅を貰ひければ之れに興起して數首をなす

満城の霞となるや春の雪

雲の袖引かゞ笑いん春の山

○

春の雪恨む甲斐なき枕かあ

寒さよ打たれて若き人の同じ病に斃るゝ者多きを見聞きて

雪折や心を冷やす窓の竹

老松の雪折したる響かな

身況

年寒み咳かで落ちなん椿かな

伊達もせず粹も盡さで紙衣かな

○

月おぼろ辻占賣の來る夜かな

鐘の音の濕めりてぬくし春の雨

○

春雨や山僧の獨り木魚打つ

○

うら〳〵と春はてもなく霞けり

前田明枝君の房州にゆくを送りて

曇りけり君京を去りし雪の後

○

短夜の夜も夜永やうき枕

聽蟲くす蛙の聲や春の暮

ヴルヴチルスが路傍一片の名もなき小草の花も猶ほ且つ人をして坐ろに涙を催さしむるものありといへる心を

花の香のたゞ一筋の誠かな

○

琵琶よりは琴と聞きたし春の雨

若草や君と半日寐まりたき

朧夜や壁一面の己が影

春の夜や大塊融けて夢に入る

虻一つ西日頽くれし橙子かな

蛙啼て里い宵寐の月薄し

白雲の浮々焉として秋立ちぬ

○

稲妻やあちら向いたる人の顔

夢さめて君を思へば蛙鳴く

行燈の針の穴讀む夜永哉

○

追分の一節遠し後の月

大根畑村岑閑として音もなし

○

世に我を見捨てゝひとり年のゆく

君戀ひし春の夕のともし頃

○

埋め盡くせ塵の都を六つの花

洛陽の霞よつゝく煙かな

○

客遊十年餘城知らぬ男かな

今といふ今なし。まことや光陰百代過客而浮世初夢か

かげろふの小芝が上に秋の蝶

故郷の友へ物をつる文のはしよ

野の梅のたよりより開きたし春の風

春の風

春風や盆梅ねぎる五十市

○

夢白し梅ちる窓のおぼろ月

○

御獵場の棒杭高し赤とんぼ

和歌

偶感二首

思ひなき人となるおそうたてけれ
つらき涙に我はむせばん

○

物いへと性なしぎるの底抜けて
すくふ甲斐なき水底の月

○

思はじとれもへばいとゞ増かゝみ
まざ〳〵浮かぶ君がれもかげ
志のぶれどわりなく人のこひしきは
つれ〴〵と降る春の夜の雨

題知らず

あか〳〵ふ人の情のしのばれて

つたなき身をもいとひこそそれ
なにがしの君へ
わかれては千里の外よ似たりけり
もくにも足らぬ道とおもへど
かりろめに分かつ袖しもつゆければ
あはずなりよし折ぞ志のばる
相見るはこれを限りとにもはれて
わかる〳〵毎にしのぶ君かな
身にしみて我が世うしとは思へども
たゞ君ゆゑに忍びころすれ

初雪の降りけれバよめる

いたづらに世にながらへばうつろ身の
思ひよ消ゆる庭の初雪
思ひさめ思ひ沈みて立つまどよ

いつしか降れる庭の初雪

○

月もよし花も吉野の夕霞
君もゐにこそ樂しとも見め

呉竹の世のうきふしはしげくとも
君が情に心をぞやる

君まさば我が世たのしく送りなん
月もる樓およしや住むとも

或る人の許へ

おのれのみ幸なきものと思にも
思べることのうとましき哉

相見ねど同じなげきに沈む身れ
世にもあはれと思ひおそやれ

新體詩

えのぶ草

（三十一年五月七日夜）

（一）

いたづきの　枕に臥せる　夢の間に
春は盛りを　いつしかに
梢にのこる　花とては
青葉がくれに　それとのみ
せめて名殘を　惜しまんと
一枝さくら　折りて來つ
しばし停めん　行く春を

（二）

百年を　かたみに契る　いとしはの
君も訪ひ來て　眺めしを
哀れと君も　眺めしを

名殘の花の色褪せて
今ハはえなくなりぬとも
人のゆかりの偲ばれて
捨つるに難き思ひかな

（三）

君を思へは吳竹の
浮世の節も身のうさも
胡蝶の夢とあぐかれて
うつゝ心もなかりけり
君を思へば打ちしめる
胸の曇りも霽れ〳〵と
かゞやく空の光をば
望みし人の心かな。

（四）

其のまゝに
睦つれ飛ぶ胡蝶の契り
妹と春が見るまつけ
外見もにくき談らひゆくを
手を引きて
紅葉ゑ似たる
ゑましげに
語る片言
見るにつけ
ともなひもくを
しのばれて
契るちぎりの
思ひかな
ひと日も永き

（五）

浮世の波の
よるべ渚の
くだけて果は
君が情の
やれし白帆を
舵をたゝ
捨小舟
沈むとも
風吹けば
つくろひて

心あてなる　彼の岸ゑ
急ぐんとこそ　願ふなれ

（六）

慈しき君ぞ　面影は
別かるゝ毎に　忍べれて
若葉れ色の　うれおちで
今日いきのふに　濃くなりつ
しげる思ひの　深みどり
情の露の　したゝりて
苦むそ迄と　知るや君

（七）

君を思へば　小夜中も
隔てし空も　れもはえず
うつゝに浮かぶ　面影を

まことの君と　かき抱き
もゆる思ひを　唇に
あつるもうたて　果敢なしや
知らでや君が　夢まどか。

（八）

逢ふは別れの　つらさをば
言の葉にのみ　知りしかど
今は心に　しみ〳〵と
覺ゆる身ころ　うたてけれ

（九）

いとしき君の　世になくば
花も眺めじ　月も見じ
浮かべる雲に　身を乗せて
浮世の外に　さまよはん

（十）

天つみ空にかゞやける
星にも餘る人の世に
春の園生に咲きみてる
花より多き人の世に
ゆかりや深き紫の
色にも出でて君と我
あつき思ひに燃えつゝも
固く契りし行末を
仇なる風の吹けばとて
つれなき雨の降ればとて
流るゝ星のごとくに
亂るゝ花のごとく
たゞ徒らに消えぬべき
唯だかりそめに散りぬべき

（三十一年四月廿九日）

病起吟

花咲いて春は盛りをうたてやな我病みぬ
雨風に胸を冷しつ夜半の夢さめ易し
いたづきの床を離れて欄干に凭り見れば
花散りて春は老いたり。

（三十一年二月十二日）

いとし君

大路に人の迹たえてわびしき宿に我ひとり
ともし挑げて文よめばふりしく雪のしと〳〵と
窓打つ音のきこえけり。
かの月花も人も身も此世にたえて失せつちん
心も空にあくがれてあやしき涙こぼるゝを
思ひづつのるいとし君。

（三十一年二月十七日夜）

星影

一人ぬる

夜半の枕に夢さめて　あたり淋しく見わぐれば
とざさぬ玻璃の窓邊より　空にかゞやく星影の
光りみるころ嬉しけれ　濁りにしまで眞清水の
きよらに冴ゆる星影を　君が眸子と眺めつゝ
澄みし心の印なる
おゝろ樂しく眠るなり。

鶯　（同上）

（一）

鳴かじと君が宣ひし　小庭の梅に鶯の
今日しも來ては音づるを　われは嬉れしくきゝにけり。

（二）

鄙もみやこもへだてなく　春をば告ぐる鶯を
などてか君の疑ひて　此處に鳴かじと宣ひし

（三）

鳴音やさしくへだてなく　春をば告ぐる鶯は
浮きたる人の心より　たのもしくこゝろ思はるれ

（四）

鳴かじと君がのたまひし　小庭のうめに鶯の
けふしもきては訪づるを　我はうれしく聞きにけり

（五）

鳴かじと君が疑ひし　庭に今しも鳴きぬるを
君が心のかはりなば　鶯こゝろは笑ふらめ

いとも永き春　（三十一年二月廿五日）

春の日のいとも永きを　早や暮れつ君を思へば
くりかへす君が言の葉　思ひ見る君が眼ざし
夕暮のつばさひろげて　我れ一人晴に圍まる
灯をばつけもねはせで　淋しさに唐詩うたふ

身にすしむ雪解の風　あはれなり豆腐の聲
なつかしや君が面影　たへがたやまたの逢瀬の
あり〳〵と目には見ゆれど　あやもなし君が你
來る月は見じといひしを　やるせなしまたの逢瀬の
やる瀬なき我がこの思ひ　いとし君あはれとも見よ
しのぶれどつゝめどいづる若草の

もゆる思ひに消ゆる白雪

友人頓野多介君が病の爲めに鄉に還るを送りて

泣かでやは、行路難。咄、半生たゞ酸苦。
往けよ君、泣くな君。花咲き鳥歌ふ。

苦屋吟　（三十一年五月廿三日）

暨の漁火消ゑ失せて　櫓かいの響打たゑつ
夢やしづけき苦が軒　月影薄く松黑し
沖つ白浪風や立つ　寄せては返へす音冴えて

浮寢の窓に嘈々と　琵琶にも似たる調べ哉

君が姿

君が姿の花ならば　句も深き薔薇の花
君が眼の星ならば　名に負ふ宵の明星よ
君が心の野邊ならば　霞ひきたる春の野邊
君が聲音の鳥ならば　きくも床しきにほひ鳥
君が情けの風ならば　小草にそよぐ東の風
君が涙の露ならば　葉末に淡き玉の露
君が姿の花ならば　蝶の我身を宿せかし
君が眼の星ならば　胸の鏡を照らせかし
君が心の野邊ならば　打曳く杖を許せかし
君が聲音の鳥ならば　わびしき耳に鳴けよかし
君が情の風ならば　あつき頭に吹けよかし
君が涙の露ならば　燃ゆる思ひをさませかし

一佳人の寫眞の裏に題す

匂ゆかしき薔薇の花　あはれ野分のよけて吹け
見る目もはしき君が身の　神の惠にさきくあれ

或る時或る思

さし滿つる潮を人のせくならば
我が思をもせきもえん
香をめづる蝶の心を剛らば
我が心をもあざけらん
春風に吹かるゝ身をば忌むならば
あはれ我が身もいめよかし
月影にうかるゝ魂のあだならば
哀れ我れのも仇ならめ

W字燈火の歌

ゆうべは故里のふのが家なる、小暗き行燈の下に打臥し、けふは都の病院に亜

ゆき行燈の下に眠る、憂き旅寐には慣れし身ながら、かゝる所にとは期せざりし身の、さま〴〵の思に夢も結びがてに、やくなき燈火の光ながむれば、怪しくもW字の形を成せり。さても、怪しき燈火の、怪しきさませるよと、あやしき思の湧きて、怪しき歌ものせるも、怪しき限りにおろ。げに思へば、怪しき世にあやしき身のたゝずまひ、心かもひの怪しきも不思議ならずかし。

（一）

わたどの渡る音絶えて　物の響の打たにて
しはぶく人の聲あはれ　かなた此方に聞ゆなる
世にも佗しき病む人の　おれや宿れる病院かも

（二）

幸なき我やうたてくも　あらぬ枕に親しみて
世をつく〴〵と永き夜の　眠もさめて唯ひとり
電氣といへる燈火の　光眺めて明かすらん

（三）

うきには慣れし身ながらも　佗しき夜のつれ〴〵に
賤の小田巻くりかへす　つれなき事やうき事に
世に追懐の涙ころ　果敢なきものと知るや人

（四）

世にもくやしき思出の　涙の果のありとしも
めゝしと我と嘲りて　望はかゝる行末の
嬉しきさまを描きては　すゞろ心の狂はしき

（五）

過越しかたや行末の　つらき嬉しき思出に
思ひつかれてまどろめば　今の我身の夢のごと
浮ぶは病めるおのが影　看護るは誰れか我友か

（六）

まだなき妻の嬉しくも　まどろみもせで終夜
病める枕に伽やする　見れば羅く其の光

怪しき文字の姿ころ　"Wife" といふ字の四字文

（七）

それと思へば木立さへ　鬼の形に見ねどやは
心しあれば行く雲も　世を捨人のすがたとも
流るゝ水のひゞきをも　妙の調べときくものを

（八）

妻と思へばすゞろにも　怪しく照すろの光
燃ゆる心の誠もて　赤きおゝろの情もて
みとりやすらん終夜　幸なき人の枕邊に

（九）

心ありてか汝が光　おゝろ無くてかなが光
曇れる胸や晴らせと　迷ふ心や照すとて
一間の中に陰もなく　眩ゆきほどに輝きつ

（十）

心ありとて何かせん　おゝろしあれば人のごと
かはる浮世の節につれ　物のすさびに誘はれて
赤き心の消えやせん　習ふ誠のかへやせん

（十一）

心なきころ嬉しけれ　怪しく照らす其の光
心しあれば人のごと　變はる習のものとせば
なれに心はなかれかし　汝に心はなかれかし

四十四

漢詩

春日病懷

自笑狂儒守舊窠　幽懷動易賦悲歌
一年春色櫻花節　偏是風々雨々多

送友人頓野多介君爲病還鄉三首（三十一年三月三日）

別後寧堪知已稀　半生落拓獨沾衣　春愁客思送君夕　風度梅花織月微」
聞君別語不堪聞　楊柳梅花却送君　明日鐵車向西去　幾年相望隔春雲」
處世隱甘世味酸　與君相約且加餐　傷心時節復心別　莫作春風易老嘆」

館山客舍偶成

不才多病渾因緣　意氣當年迹似煙　來去潮聲今昔感　望迷一碧渺茫天

鏡浦晚眺

節入黃梅點滴繁　百川集雨海波渾　華鯨一吼暮潮晴　遠浦燈微漁火村

鏡浦雜詩

日落潮聲万里通　莽茫暮色思何窮　波光嵐影骨清絕　獨立巖頭一念空
朝對青巒暮碧灣　布帆送迎望雲還　所思只是鮮魚大　總以是非付等閒
朝嵐暮靄悉堪詩　幽興此間惟自知　一笑王侯園囿小　青山茂屋海爲池

復田中稼軒

皐天無際地無邊　踽踽憐他似倒懸　總以消長信眞宰　愛看蒙叟養生篇

秋日病懷

京城四月背花臥　一去房州已晚秋　閑却青年有爲志　西風落日奈孤愁
秋日偶成用老杜贈花卿韻
任他人事亂紛々　不望青雲見白雲　男子秪應重面目　虛名寧班世間閒

四十五

海邊秋興

西風入庭樹　芭蕉先敗殘　浙瀝柿葉亦　離々石榴斑」
兩歇溪聲近　天高雲影閒　杲々朝暉淡　夕麗霧暮山」
日落潮聲滿　伊軋漁舟還　灣曲芦花亂　一帆蓼花間」
乾坤變理妙　大道儼自尊　對此秋色好　耻爲遊子顏」

奈此行

少小誤懷君子愛　不才多病志難酬　紅顏憔悴青年逝　奈此西風白露秋

秋夜宿漁家

淺水蘆花秋一村　晚投茅舍役吟魂　洲邊宿鳥聲纔息　柳外歸舟破月痕

暮秋村居

送盡行雲歸鳥迎　枕簟秋冷草蟲鳴　閉門謝客閒何物　落葉蕭々叩牖聲

山寺看楓

西風林塔兀　瀟洒人吟畔　荒寺無僧住　一溪紅葉秋

同

埋霾白雲圍洞房　地僊人遠鳥聲長　滿山紅葉斜陽裡　眞是風流物外鄉

鏡浦眺望

暮風潮滿洗苔磯　浦々灣々薄霧圍　鳴笛輪船衝暗去　漁舟伊軋望燈歸」
一帆滅去淼茫間　日落潮回灣又灣　濃烟掩盡駿州山」

鏡浦偶成

山青水白可幽倫　底事年々着俗塵　堪笑蜑娘擬都樣　漁翁亦是愛錢人

冬暖

臘月還疑十月天　狂花狂蝶繞籬邊　猫兒懶乾先生懶　日向南軒曝背眠

冬日讀書

紛々落葉叩空房　憐我一寒碩且狂　兀坐攢眉何所讀　羸頭劉蕨閱興亡

江村雪晴

雪齊風收日色冷　孤筇載酒出柴扉　炊烟暮起溪南屋　早見前峰一角青

訪富田靜軒幽居

古城山下夕陽斜　紅葉林邊白黍斜　環堵蕭然無一事　君家風日似幽家

寄富田鄰軒

翠世相將名利淫　奈之士氣日銷沈　人間至樂育英事　莫爲虛榮亂一心

偶成　樂鈴木抱山翁之韻

自笑不才慕往賢　半生逃滯數流年　縱令病骨瘦如鶴　意氣誰知獨亢然

歲晚即事

向鏡堪看憔悴姿　病窓凭枕疲頤支　日催短景年還暮　感慨　吟杜甫詩

病中元旦

東風吹遍及愁人　買得梅花欲補眞　養性還知養生事　胸中聊貯一團春

偶　感

知足安分獨樂天　哀々素志有誰憐　半生空過感傷裡　恰值祖翁發憤年

偶成二首

偏拜黃金不拜神　釣名射利老風塵　百年空化蜉蝣去　不識人間惜暮春」

又聾又啞何所關　從吾所好我心閑　黃金美女任人有　嬌鳥春閨花滿山」

偶　成

誰對明窓讀古詩　箇中消息世無知　一生爭覓營々利　不解人間易老辭

勸君行倣古人之體

勸君莫歎薄倖身　勸君須歎醉生人　有花有月看須樂　莫爲虛榮沒垢塵」

勸君莫惜万金家　勸君須惜一片花　万金集散爲人益　一片花飛減歲華」

勸君莫羨白玉臺　勸君須羨碧溪梅　風雨樓臺資憑吊　梅花留客久徘徊」

勸君莫踏權勢道　勸君須踏江村草　牧民艱々牧羊艱　若作漁翁風月老」

春日病懷

一臥病窓經九旬　殘寒料峭獨呻吟　江東恰是梅花節　遮莫人間世上春

春日偶成

東風昨夜入梅花　柳眼含青催淡霞　獨負春光事窮臥　玻璃窓外落晴斜

春　雪

未有黃鶯睍睆音　梅花撩亂已堪尋　曖雲爲雨雨爲雪　雪後應知春色深

暮春歌（短　古）

墨田堤上花　墨田堤下水　流水與落花　一年春老矣　百萬看花客　誰能惜暮春
昨日雲霞色　今日綠蔭新　金龍山寺晚　殷々華鯨吼　言問茅店朝　煙雨蛙聲閑
絡驛金釵玉帽子　絕無影入來眼中　流水與落花　一年悠々春又空

逸題　（古體）

自一病臥懊惱客　而度春色背名花　吟魂空駛櫻花地　凭窓羨見滿城霞。」
春日遲々暮煙起　看花客歸千門裏　氤氛花氣夜月臨　空使幽人恨不已。」
一瓶挿來幾枝花　床頭起臥憐麗華　不羨城中看花客　不知歸來日西斜。」
只愛日々風雨到　落花委地破春色　慇懃看盡枝上花　相對恍惚淚沾臆。」
藤作落花隨流水　流水杳然去不休　回首測茫無涯際　始知滄海伴閑鷗。」
身似閑鷗却不閑　泛々浮々弄波浪　浪間忽見躍怪魚　何事嗚然去呑了。」
夢破滿身冷汗洽　神思困頓氣息微　笑見枕上破瓶裡　映燈櫻花自芳菲

讀伊翁（エマルソン）報償論

誰把鴻筠撑大原　水流山峙作乾坤　春温秋冷鹽梅密　陽報冥加賞罰存
迷悟相依無出入　浮沈遞次別籬藩　行藏一是從眞宰　妙道由來絕語言

送伴君無得病歸蓑鄉里山口　係甲午夏

洛陽六月黃梅節、陰雲濛々雨紛々、繞屋蛙聲亂情緒、此際底事況別君、君行去京何邊去、故園草綠春佳處、滿城風物使人愁、請君歸去莫留着、誰家遊子旁神情、日夜離魂功與名、不知人間似夢幻、憐他擾々莽蠅聲、流光蹉地似梭擲、爛漫春陽忽秋夕、毀譽傷心一何愚、百年無複俱休戚、君不見、絕世風流陶淵明、田園歸去養精神、多才倩誰今何在、先生清名垂千春、又不見、一代奇材豪斗美（ゴールドスミス）、歐山米水肆登臨、志學不就意悠々、到處彈胡琴寄、語也上得還失、只合獨鼓琴與瑟

杉田觀梅

花天月地獨盤桓　杜絕塵緣心境寬　詩酒與酣春如海　香樓一夜不知寒」
遠離塵境適天眞　月色黃昏梅影新　冶李嬌桃自非匹　涘邊數樹認精神」

近田健氏將歸國欲告別而訪其寓不在獨讀机上唐詩選次杜審言贈蘇味道詩韻賦送之

正是艶陽節、君獨南海歸、々路春色遍、香風吹征衣、但恨與君別、日夜親交稀、墨陀東台路、樓雲遠幾圍、街頭看花客、車馬擁輕肥、難奈風雨至、名花忽飄飛、請君歸國日、回頭（癸巳三月）之

向帝誠、々々誠八在、寂莫對落暉、

偶感

嗟我秋風搖落天　湖雲水月黒茫然　獨憐孤寂宿紗薄　不夢佳人不夢仙

漫錄

○長閑かにうちかすめる春の景色をよくもいひ出でたりと思はるゝは、

菜の花よ蝶もたはれてねふるらん猫間のさとの春の夕くれ

てふ景樹翁の句。

○淋しくも世よりすてられ人よ知らるゝこともなくて、甲斐なき人の運命よも似たる田舍の春景色を思ひやりてよめるは、同じ翁の

世の中の春にはもれし山さとの月の光も霞む頃かな

柴の戸に鳴きくゝしたる鶯の花のねぐらも月やさそらむ

といへる歌ありと覺ゆ。

○又、誰れも、かゝる思はなせど、未だいひ出でざるゝ、

かすが野にわかなをつめばわれながら昔の人の心地こそすれ

といふ歌にこそ　所謂古跡名所を尋ねたるとき、誰れかは、この感なからん。

○榮華富貴の果敢なく頼なきものなるは

麥まくや鎌倉殿のやしき跡

てふ一句に因りても了すべからん乎。思へ、七百年前の今月今日如何に六十六國總追捕使の繁昌なりしかを。而して六百年後の今月今日、煙の如き春雨は、徒らに、將軍碑上の蒼苔と滋すと知らずや

○春は秋よりも心悲し。譬へば、秋の暮るゝは、皺枯れなる翁の力も盡きてたのづからに逝くが如く、春よ別るゝは桃の天々たる少女の思ふおとをも得いはで忽ちにして逝きたらんが如し。我は、行く春に於て、一種限りなき悲感に打たる。

春のくれ蛙はどなくものもなし

といふを誦して、古人、また、此情ありしを知りぬ。書窓ひとり春を送る夕、我れも、一句を得たりき。

春はまた蛙の聲にくれにけり

詞は及ばずといへども、其の意は同じ、

○つゝ〳〵なる折ふし、殊さ懐かしきは、亡き母の面影なり。我れは、猶ほ、母の此の世に在すが如く思ふ。嗚呼、我れは、母上死に給へりと思ふあと能はず。思ふこと能はざるに非ず、思ふを欲せざるなり。何則、母なしと思へば、我れは、何をする氣もなくなればなり。

たらちねに似たりと聞けばますかゞみ
我が影さへもなつかしき哉

鏡に對して、誰れの、此の惑なからん。母を思ひ出だせば、我れは、泣く外なきなり

○家庭の樂を解せぬ者は、無情漢にあらざれば、惡人あり。惡人よりもあらず、無情漢にもあらざる人は、必ずや、家庭の樂を解する者ならずんゞあらず。

○世にゝ、父母を蔑にする人あり、此は、畢竟、父母の難有きを知らぬ故也。かゝる人は、後、大に悲しまんことあるべし。

樹欲靜風不止　子欲養親不待

この語を誦して涙を浮ぶる者ゝ、ろれ、噬臍の悔なからんか。

○嘗て、東京輕薄雜誌を讀む。鶴陰居士といふ人の、「森有禮先生」てふ一篇を載せたり。中に謂へらく、英雄は、穉心を去ること早しと。呼嗚、吾は、つゝに穉心をさることを能はざるか。十年來、毫も穉心の減ずるを覺えず。凡夫の凡夫たること、是よ至りて疑ひなく、自惚、全く失せぬ。

○人間には妙な癖あり。兎角に、分らぬこと、怪しきこと、珍らしきもの　我よ繰遠きものを愛重する癖、是あり。好奇心といはんか、何といはんか。餘り感心せぬ心なり。天狗に怖ぢ、幽靈を懼れ、鬼神を尊び、將た、賤人を疎んじて新人を喜び、妄りに舊、樣を排して新樣を迎ふるものも、皆、これあるが爲にして、世間、の何かに八釜しきは、多くゝ、此心あるに由る。

○一犬虛に吠へて、萬犬實かと傳ふ、世間の風評取沙汰てふもののみ、特り、然るに非す、人間の事多くは皆是れ。眞正に自家の本據を定めて附加雷同せざるもの能く幾干ぞ。試に例せんか。世間にて、某は善人なりといふに、我ひとり、不然といふは、何となく、世間へ對し、不面目なるが如く思ひ、心安らずも、善人なりといふ也。隣、家でお寺よ寄附したれゞ、我、家でもせねばなるまじとする也。此くの如く

にして、世い、眞正の進歩を見る能はざる也。此くの如くまして、人い、眞正い人となる能はざる也。

○悲喜哀歡い、枯芝の上に燃ゆる陽炎よりも果敢なし。墮涙の碑は、空しく、古寺の檐に雨にさらされ、花徑金を露として釵、春は長へに△△。三公將相、知らず、驕るに足るか。甲斐なきは富貴榮達。我い、たゞ、我心を頼まんのみ。

○人は自由自在に濶歩するが如きも、靜かに看來れば、自ら、一定の埒内を逸する能はざる也。魚は能く游泳すれども、到底水を出でず。鳥はよく翔けれども、空中に於てするのみ。

○「花より團子」、是れ、實利主義の結晶語也、されど、其、つひに、團子のみにて滿足する能はざるや明かなり。

○世よは、萬一を僥倖する者あり。口を開いて、棚ゟ牡丹餅の落ち來るをまつ者あり。紙屑も落さゞる世に、鴉は、かゝる呑氣者あり。宜べなる哉、其の、生れながらにて餓鬼道に陷つるや。

○人間の生活ほど、樣々なるものはあらじ。白波渺々たる洋上に夢を托する燈盞のしあかし守れば、歌吹海中に起臥する者あり。木曾の山中を、駄馬ひきて行く者あれば、十字街頭を二頭馬車よて走るものあり。紙屑を拾ふ者あれば、金銀を捨つる者あり、同じく、これ一痕の明月。宴を催ふし、歡を暢ぶる者あれば、俯仰今古、特り、銷魂するものあり。美しとて、雪見舟を漕ぐものあれば、さむしとて、涼ゆるものあり。嬉しとて笑ふ者あり。悲しとて泣く者あり。」婚禮と葬式と、富貴と貧賤と、美人と醜婦と、小兒と老人と、柳の綠と花の紅と、さても、樣々の世の中や。

○確信なき人程あはれなるものはあらじ。昔は平氏のつはもの風聲鶴唳ゟ驚きて走りきと聞く。人生を戰場とせば確信なき人は、何れか皆平氏の落武者ゟあらざらん。

○昔は孔子、我未だ德を好むこと色を好むが如き者を見ずと嘆じたりき、今は吾、一擧手一投足の勞も自我の一念を脫して爲そものあるを見ず。吾は末世の腐儒と共に徒らに世の澆季を嘆せんとするものに非ず。然れどもかの唐虞的敦厚忠實は終に見る可らざるものなるかを恐る。

○專門といふことは素より異議をいふ可らず去れど Aut for art schoo. の如きもの

を生ずるに至りては、我、其の可なる所以を知らず。嘲罵の爲めに嘲罵し、講釋の爲めに講釋し、錢の爲めに錢を溜め、餅の爲めに餅を喰ふ。我其のノンセンスを稱するを憚らず。醫者の局部治療は勿論必要とせん。されど之れが根本の生命と如何の交渉あるかを顧みずんば、適ま、人を殺すに足らんのみ。人間の凡ての事業とは、顧ふに、皆此の根本的生命に觸るゝを要す。換言すれば、人生人道といふ大動機に觸れて爲す事業こそ、眞正なる事業、意味ある事業とは言ふべけれ。然るに、世にハ富貴の爲めに富貴を欲し、歡樂の爲めに歡樂を求めて飽かざる者あり。影法師を追ふて急走する者あり。馬鹿げたることゝいふべし。

○天地我ハそれに俯仰して、いふべからざる無限の感應に打たれ、爾として我、我を忘る。顧みて他を看れば、平々然として常て怪異の念なきものゝ如く然り。我は實に其呑氣さを知る能はず。我ハ其無知に驚く外なし。退いて自ら以爲らく、此は是れ因襲の久しきいつの世にか其驚喜心、仰心を消磨せられたるに外ならずと。さるにても恐るべきは、此の習俗といふまとなる說。人は先づ習俗以外に一頭地を拔くを要す。然らずんば遂に平々凡々に生れ、平々凡々に死なんのみ。

此の点に於て、吾ハ無人島に往かんことを思ふ。無人島可あらずとせば、亞米利加の新世界に往かんか。但し、拜金宗ハ弘布せざる處。

○士ハ己を知らざる者に屈して、己を知る者に信ぶと。我、今にして此語を解す。

○人生の愉快とする所、蓋し、一にして足らじ、前途を望みての空想も、愉快の一なるべし。親友と相語りて傍若無人なるも、愉快の一なるべし。然れども、身修まりて德高く、外に敵なくして、內に樂あり、俯仰天地に班ちざるもの、蓋し、人生の最も大なる愉快なるべきを信ず。

○呆れて物を言はざれば、ます〳〵得意げに風聽する者あり。抱腹絕倒とは此事也。

○今の社會の一大欠点ハ、眞面目ならぬ事也。何事も早呑込みわかりきつて、オヽソレと受合ひ、批評し、着手する事也。天地に不思議なし。人間は、只だ慾を追ふ動物のみ。死生は滅異のみ、宇宙ハ宇宙なりといふ。安心多き事也。手ッ取早き事が最も受けよき事也。銀流しのモテル事也。誤解也、淺見也、ウスッペラなる事也

○明治三十一年四月四日、咯痰に少しく血液を混じ居りしが、翌日に至り、咯血甚

歎、又々臥蓐苦吟の人となり、藥餌長れ事とするに至りぬ。嗚呼、我半生の、何ぞ
かく轗軻困頓たるか。天は、我を哀れまざる歟。抑もまた大に憐んで我が怒胎を鞭
ち、我が倫眠を打破せしむる所以なる乎。蓐上眠、飽いて壁に相對するも興なし。
仰向に繙く書の懶く、宿の主婦の話も盡きて、つれ〳〵なるまゝ、胸に浮ぶよし
なし言、かきつく。

血に啼いて暗に迷ふかほと〳〵ぎす
我病んで壁と相對す花の春
世は春の盛りを病める男かな
花に病んで夢に任せつ浮世の春
庭先の桃も見られぬ病かな

○神色自若、喜怒不見面、これも妙なり。怒れば大に罵り、喜べば大に笑ふ。是れ
も亦妙也。

○物と爭と、將た、人物と凡て、自然にたがへるものほど、いやなるはなし。虚師僞
善い、悪中の最も大なるもの。

○(問)先生微は毒ぢゃないんですか?。
(答)毒ですとも、微菌といつて病の虫、マア、虫なんだ。
(問)ろれでも、先生の丸藥には、一パイかびがたかつてゐますよ、
(答)ナアニ、藥のいい〳〵んだ。

○獨語　(三十一年二月七日)

我に一双の詩眼あり。以て天地人生の美妙を觀る。
我に一管の筆あり。聊か以て我が懷を遣るべし。
我に數卷愛讀の書あり。風窓雨室此の心の友とす。
我に山を買ふの錢なきも、山は我が爲に峙ち、水は我がために流る
我に一片の信仰あり。光明正大の人たらんことを期す。
我に相思の人あり。胸裡ゆゑに一園の春を貯ふ。

○宿世いかなる罪をか作りけむ。積みゆし業の廻り來てか知らざれど、生老病死は
有漏れ身の、のがれぬためしとはいひながら、扨ても、わが病と親しかりしよ。
憂よ、二十七年れ秋、病のため、房州に來りしより、年を隔て〳〵前後此ゑ三回、志し

し事の緒にもつかで、心のみ空しく馳す。げに誰やらが、歌は作り易し、事い成し難しといひけんことのうたてくも、まおとなる哉。さばれ、事いなしがたきがまゝ、せめては、易き歌にても、うめかんとするに、拙き我が身には、ろれすらも、六ケ敷をいかにせん。小舟こゞ蜑が刈る藻塩草、かのづからなる文章をなすよ、其が名を負ふ我が文の、價もなく、見るめもわやしげなる、ゐとはえなき限りなれど、もかり淺からぬうみ邊に、かくもさすらふ身の、因みあれべとて、かくなん名づけつ。

（浸雅藻鹽草紙序）

○栢崎といふ所に、館山の魔窟とかや。されば、毎夜、いづこより浮かれ來る者共よや、夜深きまで打騒ぎて、歌ふ聲、の〜しる聲など、手に取る如く聞ゆ、折々は、日も暮れぬうちより、打さわぐめり。昨はしも例の如く來りしと覺えて、女の唄ふ聲、手を拍つ音、三味太鼓の音など、さわがえう、淺間しき快樂に耽りてうち、狂へる折しも、いづおれ寺の鐘よや、夕暮かすめて響きわたりぬ、扨もおかしきは、世のさまなりけり。

三味の音の鐘に消されつ浦の秋

○治しがたきかたくなの病の床よ、露をいたみて、早く寢ぬれば、暮色蒼茫々として、人を壓するが如く、孤身蕭條の感、むら〳〵と胸に湧きて、坐ろに、人なづかしく、あたりも振りかへられつ。不平眼を檐端に移せば、野分よ襲はれて、葉も疎らなる梅ゞ枝に、只だ一つ、小さき蜻蛉の、夕のねぐら求めて、此枝彼枝と飛びかひしが、終よ、とある小枝よ止まりて、いと心安げに眠につきぬ。かくするおと、二日はゞに及べり。嗚呼、宇宙を司配し玉ふ攝理は、眇たる此一微虫をも外にせず、其愛を分ち、慰籍と安心とを與へ給ふを思ひて、ろゞろに涙催しつ、我が、徒よ心を勞して、信仰の薄きを感じぬ。

一人ぬるは我のみあらで蜻蛉もか

○九月二十九日、朝來秋雨蕭々無聊甚し。かたいらの唐詩選を取つて吟誦す。吟誦の餘、搖曳の情感をすゞろなる俗歌よ飜しつ。時よとりての興のみ。元詩にかゝはらざる、これが爲めなり。

重別李評事　王昌齡

莫道秋江離別難　吳姬綾舞留君醉　隨意青楓白露寒　舟船明日是長安

つゝい別れと言て下さるな。明日は帆かけて都の空よ。
あうて謔うて倒れりやさ〜よ。浦の夜風が寒かろが。

楓橋夜泊　張繼

月落烏啼霜滿天　江楓漁火對愁眠　姑蘇城外寒山寺　夜半鐘聲到客船

月が落ちさか啼きたつ鴉。浦の霜風身ようみる。
姑蘇のお城のあの山寺か。撞くは夜中の時の鐘。

夜雨寄西　李商隱

君問歸期未有期　巴山夜雨漲秋池　何當共剪西牕燭　却話巴山夜雨時

いつか歸ると問うて下さるか。そちら眺めりや雨が降る。
二人あらんで顔打ながめ。今日の雨をばいつ語アろ。

長信秋思　王昌齡

眞成薄命人尋思　夢見君王醒後疑　火照西宮知夜宴　分明復道受恩時

ほんに思へばどうした因果。よくも涙の根が枯れぬ。
うれし逢瀬の睦み言。夢かはかなや鳥がなく。

勸酒　于武陵

勸君金屈巵　滿酌不須辭　花發多風雨　人生足別離

献すよ杯、なみ〜注ぎやれ。何の醉たとて大事ない。花の盛りは嵐が散らす。又の逢瀬がたのまりよか。

○長い浮世に短い命、喧嘩したとて始まろか。
粹も不粹もお前もわしも、朽ちりや墓場の苔の露。
○理屈いはずゐ仲よく暮せ、裏の鴉が笑ふぢやないか。
廣い世界に少くない馴染、何んで喧嘩がなるものか。

○涙を餞す

わ　し　や　厭　ぢ　や。暮れゆく年よ伴せとて、
わしやまた浮世捨ねせぬ。嘘も誠も見分けせで、
脆ろさいホンよ水性のふ前、行かば一緒と契りはしたが、
望ある身のわけもなく、鳥渡世を去るおた出來ぬ。
一人いなすはつれない者と、もろいお前はたまりもすまい。

うおが浮世ぢや我慢して、だまつて一人で立たしやんせ。
望み果したわかつきい、わしも跡より行く程に。
うき涙おさらば玆よはな向す

○予は、よきにも惡しきにも、爲めに盡くすべき一の妻子を有せず。人生を劇場とせば、予い、只だ、其、或は、幸運を得、或い冒險を試むる者也。其他、各人が如何に彼等の役目を演ずるかを眺むゝ傍觀者たる也

○毎日夕食後、海邊を散策し暮んで、去つて、小高き丘上に立てば、眼界俄に廣濶、やゞて蒼茫たる暮色、遠く、不二の彼方より來り、灣口を碇繫せる船舶、各々弦燈を點じて、空明稀疎の星光と相映じ、翩々切々たる風聲濤聲に、水天俱よゆるぎて、涼い滿身を泌たし、久しく立つべからざるに至りて、骨は仙の如く輕く、時に、一陣の海風颯として襲ひ來れば、衣袂飄飄、恍焉、倏ち身はこれ火食の人に非さるかを疑ひ、覺えず、飛躍一番、直よ羽化せんとして、始めて能いざるを發見せしもの〻如く、呆然また茫爾、徐に四邊を顧眄して悠々獨り歸りて、清冷の夢に入るを常とす。嗚呼あの瞬間の我は、眞よ是れ無礙融通。煩惱を脱し無明を出でたる至人の玲瓏心地、想ふに、また、此くの如くに過ぎざるべきを覺えぬ。(在房の折誌し〻もの、發見せしまゝ追錄)

燈

○カンテラの油炎にくすぶる者あり。行燈の暗きに安んずる者あり。洋燈の明るきに誇る者あり。瓦斯燈の更よ明るくして便利なるに、文明の恩澤嬉しとも思いぬ者あり。光明蚕の如き電燈の下に眠つて、嘗て夜の暗きを知らざる者あり。

○曰く青燈、紅燈、闇燈、明燈、玉燈、春燈、雲燈、寶燈。曰く、貧燈、暗燈、寒燈、孤燈、龕燈、法燈、禪燈等。

○佗しきい燈蚕の燈火。淋しきは枯野の末の燈火。うれたきは柩の前の燈火。寂びたるい神の前の燈火。危きは風前の燈火。心細きい油盡きんとする燈火。賑かなるは町の燈火。嬉しきい泥濘の燈火。こひしきい故園團欒の燈火。親しきは机上讀書の燈火。懷のしきい雨窓肘を把つて舊を語る燈火。

○古人の詩に曰く、閑收書帙思疑義一穗青燈万古心。又曰く、秉燭夜游。碧巖錄劈頭の偈よ曰く眼中眼、燈外燈、柳暗花明十万戸、敲門處々有人聲。

○緑酒紅燈と亂舞する人、破壁寒燈に兀坐する人。獨り燈火の色を異にするのみならず、亦人の色を異にす。彼い醉うて醒めざる人となり、此は醒めて醉はざる人となる。一醒一醉、賢愚、つひに混すべからず。

○諺に曰く、長者の万燈貧の一燈。多きもの必しも貴からず、少きもの必しも賤しからず。煤けたる古行燈を圍んで、而も光明を盈てる家あり。皎として眩ゆき電氣燈の點ずる街、猶ほ暗黒にして照らさゞる處あり。暗中を行いて壹行くが如き者あり。日下に歩して闇を辿るが如き者あり。燈中の燈は油を待て明かに燈外の燈は信を待ちて明かなり。故に彼は暗うして、且つ消ゆる時あり、此は明うして消ゆる時なし。

○清閑を得て明燈を挑げ、浮几に對して好書を繙く、我樂道中に在り。

○春夜の燈火い暈して笠の如く大に、壁に映ずる人影亦山に似たり。冬夜の燈火は凍にて豆の如く小に、人影恰も寒鴉に似たり。

○たんと過ごしやれ切ないまでも醒めりや尚更うい浮世。

○丸い頭顱で四角な袖で浮世離れて暮らさうか。

○紅葉の小説は譬へば梨子の如く、露伴のは密柑の如く、鷗外のは(主に飜譯)林檎の如し。若し、夫れ絃猶を柿に比もれば、涙六い石榴の如きか。我は林檎の最も淡きを愛す。

人生

斑白垂死の老は動もすれば朝露の命を說き轗軻失路の士は輒ち行路の難を叫ひ血氣不平の徒は毎ゐ塞翁の馬を嘆す心事共に愍むべ一吁命や難やはた馬や彼れ豈に終に其眞相ならんや

杖を春山の夕陽に樹て一陣の暮風と飄零する落花を悲むものと蕭々たる好雨の中に嬌柔堪へざるの妖姿を顧はし朦ろにかすむ月の下と楚々人を動かすの淡裝を施し青天白日と向つては烟漫たる盛飾を呈したるを忘れたればなり怒濤さる狂涙怒濤山を崩し空を嚙む北海の荒涼を望み來つて直ちと海となすものい夫れ万里一碧平然席を布くが如く水天遠く相接する處布帆点々波間に相滅する光景を知らされば なり燕雲跡消えて涼風梧桐と戰ぎ一行の旅厂遙かに秋聲を齎らす歩を負廓の耕野と移して鑛

々たる十里の黄雲を望見して徒らに民の天福を羨ひものは雨に耕し風に耘ざる辛苦の粒々たるを思はざればなり彼れ只だ其一端を叩いて他端と見ず直に以て然りとなす輩者の象を探り井蛙の海を知らざる耳笑ふべきに非ずや

仰いで天を望む天蒼々たり伏して地を瞰る地漠々たり日月星辰懸り山川草木列なり禽獸虫魚動き風雨雷霆響き地震海嘯△△春去り夏來り秋謝し冬代る花落ち花開き草枯れ草生して一年をなす一年三百六十日積んで千百年をなす眇然たる人類其間に介立し傲然として宇宙を睥睨し萬物を捕らへ來つて己れに從へんと欲す蚊虻山を負ひ蟾蜍龍車をうつといはんか我れ其非なるを知らず

試に見よ夫の朝に出て夕に死する蜉蝣の生活にも一代の浮沈あり簷下瞬時露を待さざる槿花の生活にも又盛衰の數あり誰か道ふ槿花一朝の榮と誰れか道ふ蜉蝣の如しと試に爾が指を據へて百年の壽命を量れ百年三万六千朝朝々夢裡に逝いて爾が頭を回らす時果たして能く蜉蝣の感なきか槿花の榮に異なるあるか必ずや思半に過ぎん蓋し茫々たる宇宙に比すれゞ百年は斷髮のを刹那のみ電光のみ石火のみ然れども爾にまでは決して然らざるなり東坡が所謂其の變ずるものよりして之を觀れば則ち天地も曾て一瞬なる能はず其變せざるものよりして之を觀れゞ則ち物と我と皆盡くるなきのみ蜉蝣一日の生活も人間百年の生活も亦復た何の差違かあらん同じく榮枯し盛衰し浮沈す百年を以て一日を憐む非なり一日を以て百年を羨む又非なり顧ふに彼れ自ら知らざるなり

夫れ達人は達觀す小人の眼界は咫尺を出でず一旦心に平らかならざるや目に觸るゝもの不平の觀に非ざるなく耳に聞ゆるもの不平の聲に非ざるなし仰いで天を恨み伏して地を厭ひ顧みて人を惡み退いて己れを忌む天々たるの花の開落將た何の彼に關するものぞ淙々たる水の盈涸將た何の彼に渉るものぞ喈嚶たる鳴禽蒼萃たる綠葉將た又何の彼に連なるものぞ皆自然の氣運に從ひ四時の循環にあひて變ずるのみ而して不平の人把つて以て己を傷む夫の達人や能く己れの境遇を脱して眼遠く宇宙の外に徹す是に於てや事に凝滯なく万物心に渾融して自他の別なく主客尊卑の見なし王侯にも同感し漁樵にも同感し蠢蠢にも同感し稚孩にも同感し紅葉ふみ分けて妻戀ふ鹿にも同感し斷崖に攀ぢて山月に嘯く猛虎にも同感しつぶやく如き小川の流れにも同感し翻々として戲るゝ蝶を見ても同感す蓋し彼れ能く其天賦の眞を見能く其自然

の化を知ればなり夫の小人や畢竟己れを解せず何んぞ知んや他をや宜なり其不平の鳴る

眼を轉じて人の實際を見ん乎苦もる風の肌をさき波間に叫ぶ千鳥の聲に結びし夜半の夢を醒す荒村漁家の生活も人生なり白馬銀鞍に跨りて竟宴楊柳の巷に永日を消する錦城公子の生活も人生なり勞役日も足れ足らず頭を垂れ腰を屈して錙銖を爭ひ取る紫陌佑人の生活も人生なり悠々閑々時に丁々の響をとゞめ溪を隔てゝ相眺る空山樵父れ生活も人生なり一國の政柄を左右し万民を顧使する王侯將相の生活も人生なり三家村裡の專權を握りて啓咳隣兒の啼を止むる家長里正の生活も人生なり一簞の食一瓢の飲水を呑み肱を曲げて睡る樂其中ゝ在る顏回原憲の生活も人生なり食に八珍を列ね寢に綿繒を擁し出づるに車馬あり入るに妻妾の迎ふるある陶朱椅頓の生活も人生なり北馬南船東奔西走席暖かあるに遑あらず突黔むに暇なき孔聖墨賢の生活も人生なり靜坐默居一室に籠棲して天を談じ玄ゝ入る老莊の生活も人生なり或は泣き或は笑ひ△△△△擧げ來れば人間生存の差千種万種ゝして足ざるなり敢て問ふ生何か故に斯く雜駁なる等しく五感あり四肢あり百骸あり横目にして縱鼻而して同しく天に授かれ地に載せらる其受くる感化蒙る制裁當に均一ゝして異なるあるべきなり而して斯く懸絶す抑も故なくんばあらず予竊に謂ふ譬へば夫の水の如き乎或は汚濊に溜り或は谿谷に落ち或は河川に流れ或は洋海に注ぐ遠かにして雨となり霧となり霰となり雪となる其体千狀端倪すべからざるも終に水たるを失はず譬へば猶ほ夫の雲の如き乎所謂其浮々焉として黍を蒸すが如く縷々焉として絲を吐くが如き或は散して綿の如き或ハ鎔けて銀の如き或は樹を繞て行き石を抱いて慰ひ忽にして練の如く縵の如く馬の走るか如く虎の蹲るか如く或ハ亘りて樓閣城闕となり峙つて岳となり忽にして彌漫し忽にして嶂岫に隱潛す百化の異態得て捕促すべからざるも竟に其雲ゝるを失ハず

今夫れ人間生活の千種万種あるも變斯の如きのみ其呱々として生るゝやかけまくも畏き雲の上の公達も壁一重隣を隔つ九尺二軒に生るゝ嗣君も共同一髮の問ふべきあるなし偏へゝ但た其外部の物質的作用の結果ゝ頼りて天淵の差を來すのみ

因是觀之人の人たる所以の根本は唯一のゝ何をか人の人たる唯一の根本といふ曰はく天賦の性是なりエマルツンか所謂「スピリット」(精靈)是れなり嗚呼天性は人の精

髓なり境遇は人の空殼あり尊むべきは天性なり卑むべきは空殼なり平々たる俗人は卑むべきものを尊み尊むべきを卑む夫の達人や其尊むべきを知り超然隙表に遊ぶ俗人は百年を短しとなし於是て知る彼れ其の朝露の命を説き行路の難を叫び塞翁の馬を嘆するもの其末を見て其本を見ず其苦むべからざるに苦み樂むべきに樂まざるを彼豈逐に眞想ならんや深く知らざるか爲めのみ

嗚呼人生は單一なり雜駁に非ざるなり人其天賦の眞性を發揮せんことを要す若し爾ち人生を知らんと欲せば起つて夫の山を見よ山自ら青々たり行いて夫の水を見よ水自ら流る

餞春漫言

をりふしの遇り變りあろ物ごとに哀あれと兼好法師のいはれし如く「春は一際心も浮き立つ程に歸れば又一際心も打ち沈みて覺るなり鳥の聲などもあとの外に春めきて長閑なる日影に垣根の草萌え出づる頃より、やゝ、春深く霞わたりて、花もやうゝけしきたつほどとそあれをうしも雨風うち續きて心わわたゝしく散り過ぬ青葉になり行くまで萬に唯心をのみぞあやまする」とは巧に這の間の消息を寫せる好文字に非ずや昨日墨陀東臺の路香雲一帶遠く空に連り日暖かに風恬かに蜂舞ひ蝶躍る彩霞靉靆和氣悠揚春心天地に滿つ大都百萬の子女氣熱し心狂し彩面異裝三々五々絡繹として相伴ひて花に醉ふ一日又一日西に東に狂顛痴醉日の暮るゝを知らず然れども桑枯落衰は免れがたき數にして代謝は自然の法則なり狂風一夜雨ゐ和して滿城に入るに及び花飛び蝶駭き醉ふ者始めて醒む昨日繁華熱鬧の衢今日寂莫人の訪ふなし爛漫たる香雲は敢なく飛び散りて嫩芽扶疎として煙の如きを見る遠山にかゝる白雲は散りにし花のかたみゐり青葉に見ゆる梢には春の名殘を惜まるゝとい吾人が今日の所懷を寫せる妙句にして吾人は更に之を解剖すること能わざるなり。

吁今日の春は逝きぬ深山は理か幽谷の邊歟吾れ其處を知らず但だ言ふ可らざる一種の感慨ハ吾人の胸臆を埋め來つてさながら親しき懷かしき愛人に別れたる思ゐるなり松本奎堂春を餞するの詩に曰ふ欲迹春歸處問春々不語流水與落花悠然背人去吾人も亦正に春の歸る處を迹せんと望むものなり嗚呼春爾何くよか歸る歸らゞ何ぞ吾に告けざる爾の來る悠々たり爾の歸る悠々たり吾が心亦悠々たり吾が心何か爲めゝ悠

々たるか深く爾を思へばなり何か爲めに深く爾を思ふか深く爾か心ばへを愛すれば
あり爾の吾に見ゆるや無邪氣にして潔白に憐れにおとけあさ女の如く嬌爾として吾
を迎へ振然として吾に接す吾が思ひ何んぞ和樂せざらん吾か心何んぞ洋々たらさら
ん爾は爾と袖を聯ね手を携へて共に逍遙せるを以て意氣揚々私かに人に誇り世に驕
りぬ而して爾今獨り吾を捨てゝ悠然として行く吾れ豈に思慕の念なからんや吁嗟春
よ、爾何ぞ歸らざる、爾何ぞ先に吾を愛して今吾を顧みざる吾惡意を以て爾に接せ
しか吾未だ之れありしを見ず吾ハ私かに百年を爾に契りき涕るに、今や、茫々として
天地に知己なき寂しき憐れの身とはなりぬ獨り怪しむ無邪氣なる乙女は何の故に吾
を捨てしか吾其好んで吾れに分れざりしを知る何とあれば彼れ去らんとして全く去
らず逡巡躊躇して吾を顧望せるを見されば彼豈に無情ならんや無情あるは夫の惡む
べき風雨のみ。

嗚呼吾れ何ぞ爾の吾を遺したるを恨みんや吾は却て爾を恨むの罪なるを知る吾爾に
告く爾開かずや一樹の蔭に息ひ一河の流れを掬む又他生の緣と吾の爾とに於ける偕老
を期し同穴を契りき曾に一樹一河のみならんやざれど悲き哉茱枯の數免れさるは自
然の法吾今爾と幽明地を隔つといへとも會ふものは必ず離るとか離るゝもの亦會ふ
ことあらん。夫の風雨のもの焉んぞ吾と爾を分たんや爾其れ行け吾爾を送らん

白露

壬戌十一月作日

おしてみばおちぞしぬべき秋はぎの枝もたわゝにおけるしらつゆ

是れ平安朝裡の詩人か優婉の詩想をもて△△を形容せるもの白露ろも何物ぞ空濛たる燕發氣の夜間清冷の氣にふれて凝結せる涓滴のみ草葉にうへ蘿のもと微花たる十里の沃野つらぬきあへぬ千顆万顆の珠をちらして曉に立出づるたび人の心なき袖にふれて碎くるがまゝにし人をして坐ろに其地を擇ばすして居るの無分別を惜みてやまざらしむ白露そもなんか故に人のあはれをひく裊娜風にたべざるすゝき葉のすゑそよとのたよりに落ちもしぬべき水晶のきよらにあざやかなるいかで人のあはれを催さゞらんや人生もと無常あるが如くあしてなくなきが如くあしてありさながらくだけんとして碎けずれちざらんとして後ち落つる白露の運命よ似さるものなかゝらんや白露彼れ宇宙の眞を知る乎三逕荒ゑ就いて野草衰へつくし一叢の黃花操高く韵遠く皓珠溥々として其間に散点す看何ぞ幽かにして婉なる白露彼れ宇宙の美を知

るか十圍天にさしはさむ巨木寸莖地をいらふ野草動搖紛糾風の爲めにくるしむ枯槁凋衰はとんぢ色を喪ふ活液降る處忽ち色を復して色澤々生氣流れんと欲す白露彼れ宇宙の善を知る平玲瓏透徹清うして且つ鮮かに一点微塵のけがれをつけざるもの其れ白露の性か空濛たる蒸發氣凝つて而してなせる涓滴といへども其源や我之を造化の片影を荷ふて此世ゑ送られたる天使となす嗚呼彼は眞を備へたり美を備へたり又善を備へたり宜あり高潔なる詩人の之にあひて同感を表するのあはれゑしてふかきや

原頭秋草簇明珠　月影玲瓏見欲無　到處垂々斜向路　隣隣吟袖避塔潘

明治二十七年一月十三日夜稿

〇張良は、漢の才子にして、小沛の木强漢をして、よく、其襤褸をかくして衮衣を着けしめたり。有朱雲の如き詞人の牛耳をとれる歐陽公をして、放出一頭地と叫ばしめし東坡は、實に、一世の才子なりき。才子々々、何等の好語ぞ。多少の志氣を抱いて、此世ゑ生る〳〵もの、誰れか、才子たるを願いざらん。その、人ゑ敬せられ、世に重んぜらる〳〵値あればあり。近來我國の社會、才子の語、大に流行す。三五相會するや、輙ち曰く、彼い才子なり彼は才子にあらずと。才子や、到る處に持て嘶さる。睹る者、私に之を羨み、顧みて、其才子に生れざるを憾とするもの〳〵如し。予、其才子なるものを見るに、誠に、怜悧口給、よく、人をそらさず、圓轉滑脫、ふれて玉の如し。周旋往來、人の爲めゑ辞せず。所謂世の世話やきなるもの。此才子や、自家の本領なく、空々たりといへども、而かも、世ゑ用あり。然れども、白面ゑして冶容、眼鏡を穿ち、高帽を戴き、絹衣跟を沒して、其步俳優の如く、路傍婦女の一眄を買ふべく人ゑあひて、輕口怪辨、柔軟ゑして、斷乎たる所なきものと目して才子といふに至ては、其意のある所を解するに苦む。かの東坡や、張良や、人推して、才子となる。世話やきや、冶郎や、人、また、推して才子となす。其才子の義に於て甚しくかはれるものあるを知るべし。予、私かに解して曰く、才の言たる細なり、（勿論才を訓してわづかにとよむことあるが、又、僅なり、細子、僅子、豈に、恰當の文字にあらずや。古人曰ふ、始めて、備をつくるものい、それ後ならんかと。世人の才子として持てはやもや、ワザと、反語的ゑいふといへども、而かも、よつて流る所の弊や、決して、少小といふ可らず。何となれば、惡人い、其意を、さくがまゝに解すればあり。此

蹤、よろしく天下後世の爲めに、其の九族を夷くべきもの、豈に、獨り、自然の應報にのみ任せんや。

○人、皆奇々妙々の、驚くべく怪ひべきものなることを知るも、平々凡々の、更に怪ひべく、驚くべきものなることを知らず。神代の邈矣たるよ驚きて、今日の、まさ、神代の如く邈矣たるべきに驚かず。一里の、遠き千里なるに驚かずして、千里の、近き一里なるに驚く。信すべからざるの妖怪を信じて、信すべきの神明を信せず、只だ、山の高きを見る。地の平かなるを見ず。階段を踏まずして、頂上に到らんと欲し、牡丹餅を棚に置かずして、口をあいて、落ちんことを待つ。佛氏曰ふ、色即是空空即是色と。予、敢て曰ふ。天下、奇々妙々なし、皆、平々凡々なり。天下、平々凡々なし。皆、奇々妙々なりと。

春の山

春の彌生のあけぼのよ、
花ざかりかもまら雲の、
四方の山々を見わたせば。
かゝるぬくまこそ無りけれ。

と、闌いと可笑しき無邪氣の聲音は、やさしき天便の諾ふにや。人の心も和らぎて、霞の山は、眼のあたり、家の門遊に浮ぶめり。法々華經の其聲と、にはひゆかしき朝風ふ、うつら〳〵と千金の價にませる曙の臥間に微けくきてゆるは、予が寓居の後ろなる家の子の、唱歌をうたふ聲なりけり。

昨日といひ今日とくらしてあすか川流れて早き月日かな。かゝなふれば、はや、六年の前、學問の修業を志して、親一き朋友と懐かしき故郷よ暇乞して、都の空よ旅立ちせしは、丁度四月の二日、春もやゝ景色とゝのふ頃よして、流れにろひし菜畑は、一面に、黄金の花を散らして、其が上を胡蝶の飛びこふも面白く、陽炎の縱横にきらめくは絶えず綾を織りつゝ、目より物を隱さんとすめり。吹く風も面にさはりて心地よく、此處彼處に鳴き渡る鳥の聲は、我を慰めんとて奏する天の音樂にも似たりけり。霞のなかより、高く眞白に懸れるは、是れなん、中川の流れより行徳(下總)の濱に下る五十石積みの端船にして、徐々としてゐざるが如く、進むともせす、長閑かに、中嶋に生ひたる松の梢の間よ消え行くなり。

十八里を隔てたる筑波やまは、艮の空に、遠く半面と雪の袖より露はしつゝ、朝よ夕に、予が學校に通ふを見やりて、喜ばしげに打ち笑ひに似たり。予が家の西の方

に當たりて。村の渡船の着く向ひ村の鎮守の杉森の間には、八面玲瓏のふじの峰の高く蒼突にひ入りて、斜めに、其が白き影をば、青き流れに映せしが、見れば其白き裾をば、緑の春染にやなしつらん、腰より上のみは白かりけり。其の西方に下がりて、屏風をたてまはしゝ如く、蜒蜒として引き連なれるゝ、甲斐、武藏の山々にして、最もよく見ゆるゝ、上野と信濃とゝ界せる三峰山なり。三峰ゝ、予が村を距る三十里許、阿夫利神社を祀れるものにて、當國の靈山たり。こゝを以て、予が村々には三峰講社といふものありて、農事の間隙ゐて、人々、必ず、參詣して、五穀の豐穰と國土の安泰を祈らざるはなく、予が家ゝ、年々其護摩札を貰ひ、予は、又、名物なる味も甘みもあさおこしと青色や赤色もて染めたる麥藁にて製れる翫具のフッパとを賞ひぬ。八十になれる予が祖母ゝ、木の葉をさそふ嵐の吹く寒き冬の夕べには、予等を圍爐裡のまはりゝあつめて、其若かりし時、同志の誰彼と、處々の神社佛閣を巡拜せし事を話せし序でにゝ、いつも、筑波ゝ、伊弉諾伊弉冊二柱の神をまつれる靈山なれば、我等（二人稱ゝて昔の人の使ふことば）がおはきうなりてよめを迎へん時分ゝは、子供を持たんが爲め、必ず、一度は參れ。又、三峰ゝ、我等が家内の安全を守り、難火災を除けさせ給ふ、我等ゝ取りてゝとも難有き守護神の鎮座せるお山なれば、心して、ゆめ登山禮拜を忘るゝなといひき。されば、余は、毎日正午の撃柝に學校より飯る路々も、これを仰ぎては、敬慮の意を表して眺めき。

予が村の北より東にかけて、垣の如く、一帶にとりまけるゝ、下總の山林ゝして、其東の端ゝ、一きは目立ちて見ゆるは、かの北條に滅ぼされし里見の據城にして、犬飼現八が信乃戌孝と一世の勇を奮ひし芳流閣を去るゝと遠からざる刀根の深淵に臨める鴻の臺（一名國府臺誰れも知れる）なり。其が遺物を保存せる總寧寺（？）の日々撞き出す鐘聲は、煙雨縹渺たる二里の田畦を傳うて予が村々の戸毎に、炊飯の時刻を報じ、ギッシ〳〵と岸を噛む響は、兩國と關宿（下總ゝ在り坂東太郎の分流する處）の間を往來する通運會社の滊船にゝて、裂くが如き笛聲はポーンと響く鐘聲と和しぬ。學校より歸りて、五六の友垣と青き田の畔に坐して、茅針を拔き、やがて、草の上に横りて角觝草を取りて、强弱を闘はしつゝ、日蔭の移るも知らず、あちこちゝ田の草を採れる人影の見えざるに驚き起つて家路に歸らんとすれば、今や西の山の端に沈まんとする斜照の、長き流に反射せる折から、鑄の如く立ちめぐれ

る青き山林の、江の霞に打ち蔽はれて、影も微かあるに、白き眞帆片帆の、あるハ高く、あるハ低く連りて、上手に急ぐ景色は、何のけじめあき小供心にも、一種の神韻を吹き込みたりき。

されど、都に出でてより、春は上野淺草とそゝめく人波にゆられつゝ、靜心もなく、日をくらし、夏は入谷の朝貌、あるハ、龜井戸の藤、萩寺の七草、滝の川の紅葉とて、心ともなく過ぎ行けば、昔見し靜けき故郷の春景色、あるは、四方を繞ぐる山々の眺めなど、心に浮ぶ折もなく、唯だ、視聽くものハ塵を蹴たつる車の影と、砂を飛ばす蹄の音とのみ、斯くて、花咲き花落ちて、早くも、爰に六とせの春秋を夢の如く打ち過ぎしが、都のはてなる此の里に移り來ゝより、又一年、春はいつしか廻り來て、山々かすむ今日此頃、他郷の空にさすらひの旅の心も忘るゝ許り、片しく袖も枕さへ心うかるゝ折柄に、微に聞ゆる唱歌の聲ゐ、故郷を繞る山々の、なつかしくも心ゑ浮べるまゝ、斯くは書きつけぬ。

早稲田の曉景

余は、昨夜九時少し過ぎたる頃、床に入れり、例になく、茶の苦みに遇ふと少く、差したる煩悶もせず、すやゝゝと眠ゑ就きしが、曉方近く覺えし折柄、頻りに、蚤の苦痛を覺えて、手先を防げば足に行き、背を撫づれば乍ち肩邊に來り、よひ一と時、之れと戰ひしかゞ、目はさえてまたゝゝ夢を結ぶ能はず、思ハ坐ろに前途の期望ゑ馳せて、目ハ益々さえたり。思へらく、來年の卒業論文には 支那倫理說の變遷 を物せん。また、一生の中には、是非、支那文學史、東洋哲學史を編まん。終生の事業としては、佛敎の敎理を窮め、其の經典をば、簡易なる國語に物して、普通一般の人々にも、容易く、佛敎の何たるものなるかを知らしめん。(己れも、今は現に、容易く知りたしと思ふの一人にして、まだ、其何たるを知らねど、)左するには先づ基督敎など研究して、互ひの長短善惡を定むる事、必要なるべけれゞ、今のうち、充分に英書を解して、之れが研究ゑ資するの、先づ第一番に必用なるを感じ、而して、后ち、除ろに佛敎々理と對照比較して、日本の破壞せる倫理道德の根本基礎の万分一をも固めん(余は、常ゑ、人に安心立命の地なければ何事も成し得るものに非ず。又、安心立命は、宗敎倫理の大本より得たるものに非らざれば叶はずと信じ居ればなり)

など、思ひ續けて、蹴然床を離れ、口嗽ぎなどして、驀て前の田の畔に出で散歩しぬ

見渡せば、早稲田の田の面に、今や、早苗を植ゑんが爲め、一面に耕やし鋤かれて、水を湛へ、苗間（稻種を蒔ける田也）は、三四寸許りなる青苗、朝露の白き珠を貫きて、生々としたる樣、見れば何となく、蘇生せる思ひあり。空を仰き瞻れば、暗の星、一つ二つきら〳〵として、田面に映り、其のあたりを、五位鷺よや、五羽六羽相連りて、空を掠めて飛び行くなり。東の天に、紅ゐと紫との雲、刷毛にてはきたる如く、一と走りよ筋目立ちて横ざまに幾重にも長く曳かれたるは、摩れ切れたる大筆もて、勢ある手の書きなせるにも似たり。其の後ろには、旭の光、斜めに反射して燃ゆるが如く、雲に生命あるかとばかりなり。前面の目白臺、關口の瀧つぼのあたりは、薄く、朝の霞みに閉ぢられ、近きほとりの杜は、黑ずみて見えぬ。霞のかげ、杜の裏にゝ、別に、仙人の隱れ居るが如く、なにとなく賑かよ面白げよ音樂にても奏し居るかの樣に思はれ、恍惚として眺め居る折しも、隱々と霞を洩れて、水を湛へたる田の面に響き渡る鐘の音には例つも、夕暮空に沒しかゝり一太陽を望みつゝ聞きし時とゝ、異りて、全世界は、今あけたりと告ぐるが如く聞かれ、余よ、見返ある前途あるとを物語るが如くに覺えて、例よも似ず、愉快よ樂しく聞かれぬ。又、四方の杜林にゝ、曉謠ふ雀の聲勇ましく、又、遠く聞ゆる家鷄の聲、長閑かに響き、心も茫然として、長く細く靜まり行きて何處にか消え行くに從ひて、耳を傾け暮ひ行かまく欲りする許り。やがて、また、幾度となく聞ゆるは、此の世の聲とゝ覺えず、雲の彼方にて天人の奏する音樂にもやと、聞ゆ。げに、王陽明が曰ひしが如く、一日の中に古今あり。朝と、太古の世にもやとの言葉、今ころ眞よ心に感じぬ。田畔の青草、一面に白露を鋪き貫きて、觸るれば碎けん許り。のゝる美しき有樣は玉の臺に住み、深き窓の裡にかしづかれたる人々は、よも知らざる觀物にこそと覺えぬ。また、細き溝を潺々と流るゝ小渠は、細きながらに、絶えもせで、チロ〳〵と青き田の面に注げり。「春の水チロ〳〵落つる青田哉」とは余が友の吟せし句なるが、好くも自然に風味多く咏まれたるものにて容易きが如くよして、なか〳〵難かり。さばれ細き流れも、源あれば盡きざりけらし。人の學問も、事業も、根據あり、淵源あることゝ大事なれと悟りぬ。何ゝ兎もあれ、此朝ほど、心地すが〳〵しくて晴〻したることはなし。是れ、偏に、朝起の德といふものにや。

「百年の後」の一節

明治二十七年二月十二日稿

○天地は、美より生れたる一大嬰兒なり、日月の眼は、爛々として物を射、山川の身躰は、草木の衣を着け、兩脚と双肩とは、延びて乾端坤軸に張れり。時に、暴風の大息を發し、雷霆の叫聲を洩し、怒りて、地震のぢだんだを踏み、泣いては、海嘯の歔欷をなす。然れども、其常にあつては、平穏恬淡にして、一擧一動、自然の法に叶ひ調和融解して、常に一種の音樂を奏せり。其靜かにして眠るや、綿の如き房顏い瓔々として吹き渡る軟風に、滿頰に湛へたる紅潮の淪漪を起し、和鳴せる群禽、枕邊を繞り妍を爭ふ百花に臥床を圍まれて、スヤ〳〵として苦を知らざる、無邪氣にして天與なる稚態に對しては、行々たる鄙夫も、躊躇たる野人も、竚立して、爲めに、吁嗟の聲を發せずんばあらず。

今、夫れ、禽獸と魚類と人間とは、また、美の腹中より生れし同胞にして、天地の小弟たり當に阿兄を標準とし、摸範として行進し、美の本躰に歸らんことを期すべきあり。而して、白黄、人種を分ち、東西、利害を異にして、呑噬搏擲、骨肉相屠り、餓狼の醜を演ず。噫、又、迷へり。君見ずや、テームス河上盈々の春水は、是れ、秦淮煙に鎖て盈々の春水にして、巴里城頭の玻窓を射る明月は、これ、洛陽城裡の幽閨を照らし來る影なることを。又た見ずや、物換り星移る百年の後、此の差別の我見を抱きて疾視反目せる敵も味方も、誰れか知らん、北邙山上一片の煙と化し去りて稜々たる松風は、遙かに、城中日夕の歌鐘と相和し、懷古多感の詩人をして、陣々たる暮風に立ち、徒らに當時を回想して、千行の暗涙を飲ましむるものある事を。嗚呼四支朽ちて白骨原頭を蔽ふ。狗は以て、睚眥の怨みを雪がんと言ふ歟。麥酒店裡の空樽に蹲踞して數杯をかたむけつゝ、興に乘じて、徐ろに當年を物語る孤村の文字なき史家に問へ。

○社鼠城狐、人其の、物を笠にきて難を免るゝの猾知を惡む、鬼に追はれて地獄の神に隱れ、喧嘩に負けて恨を父に訴ふる小兒はゝ無邪氣にして、其情や憐むべし。爲すべからざる事をなし、恥つべき事を恥ぢず、言を其君に託し、罪を其道に歸し、左避右退、曖昧模稜の間に、己の影を沒せんとするに至りては、其の猾知や狐鼠に倍するものにして、惡みても餘りあるものと謂ふべし。大臣の、名を至尊に託して、其難衝を避け、學者の、言を聖賢に歸して、其責任を免れ、書生の人情を探ると稱して落語に耽り、近松を研究するか爲めなりと稱して、女義太夫にはまり、春水を見

すやとて、遊里にうかるゝが如きもの、皆、然り。彼れ、遊里の春水を作り、女藝太夫の近松を出さざるを知る。而かも、これに託するの已に便あるを知る。近松や、春水や、おれが犧牲となる。九泉の下、流涕慟哭、まじふるゝ血を以てせざらんや。寄語す社鼠城狐のもの、何ぞ、野猪の如く、獨り疾走せざる。何ぞ、猛虎の如く高く咆哮せざる。左眄右顧、鼻息を窺ひ、首鼠兩端顏色を視る。人其陋に堪へず。

○嚴父慈母、古へより多くは然り。母は、一家の内を司り、父は外ゝ在りて多く家に在らず。且つ、男子の性は硬にして、女子のは軟あり、父の嚴にして母の慈ある 共に、天性境遇の然らしむる所なり。兩者相須つて家庭の和諧をなすもの、偏廢すべからざるなり。若し、父にしてなき時は、其兒は、終に、脆弱の人となり、母ゐして存せずんば、其女は則ち疎野鹵莽とあるべし。父ゝ、嚴酷ゝ過ぎ易く、母は、低憤の愛に溺るゝを救ひ難し。然れども、平居、膝下ゝ在りて、其薫化陶冶を受くるもの、母に如くはなし。予、不幸にして、夙に、母に別れ、幾んど、母の愛を知らず。兄弟ありといへども、皆男子ゐして、疎放豪散の性、眞話、情を通ずるあるなし。顧ふに、是れ、亦、母の聯絡なきが爲めなるべし。相見て嚅呫他人の如しゝ伶仃孤苦、半夜衾を沾すゐと、少からず。唯だ、老祖母ありしも、耳聾し、目かすみて、又相、幇助するに足らず、僅ゝ、其若かりし時の見聞の事ども、打ち談りては、予を慰めしも、今や、逝いて在らず。故に、毎に、李密の陳狀表アーサングの「寡婦と其兒」といふ一篇を讀むごとに、泫然として涕泣するもの、數ばなり。人、皆、母あり。嗚呼、我、獨りなしといひし古人の心を想ひやりて、常に、同感の涙を浮べぬ。人ゝ生別の苦を云ふ。生別、何んぞ、死別の苦ゝ如かんや。何となれば、終に、相見るの期あければなり。母の逝くや、瀏、僅かに八才、慈愛ゝ顏は、髣髴として、かすかに、眼ゐ存するのみ。昔し、英のクーパー、其母の遺像を見て、深く悲みき。瀏や、遺像もなし、只幾かに、人の既く所を聽きて、心ゐ想像するのみ。思墓、日に、徒らに增すのゝ。嗚呼、瀏や、終に、不幸の人たるを免るゝ能わざるなり。母、逝いて、今や、十有四年を經ぬ。向天呼べども歸らず、嗚呼只だ寂々たり、岡千仞、弟德輔と大夫人を奉じ、眞氏佐藤君を野村村居に過ぎるの詩ゝ曰く、

楓柏經霜秋色新、　輕車郭外奉慈親、
人間至樂是何事、　只有弟兄情話眞、

詩人小野湖山これを評して曰く、眞に、是れ、間の至樂、宜しく、畫師を倩ひて、村莊家筵の圖を作るべしと。向山黃村も、亦、曰く、眞情發露す、是を眞詩となす、必しも、辭句の巧を以てせずと。人の、眞情を發露し、一点猜疑のきもの、親子兄弟の間を除いて、はた何れの處にか、之れを求めん。

○愛の連鎖なき家庭ほど、寂寞たるものはあら。譬へバ砂礫累々さる沙漠の如し。憩ふよ、幽邃煙の如き綠蔭のあるなく、渴を醫するよ、清淵玉を迸しらす碧流の走るなく、行くも、住まるも、坐と臥と、共に、蒸熱燬くが如き沙上のみ。清風の、來たりて扇ぐなく、徒らに、妖氣の、身を襲ふあり。耳よとるものは、砂礫相軌る音のみ。觸目、止だ、無味坦々たる沙原の幾千百里なるを見るのミ。譬へば、北海の氷原の如し一面玲瓏、見て、而して心目を悅ばしむるに似たるも、冷凄寒冽、接觸すべからず、人、凍死せずんば、則ち、幸なり。譬へば、悲秋の如し。樹々皆秋色、山々惟落暉、零露清なりと雖も、肅殺の氣あるを奈何。降霜雪の如しと雖も、蕭索の針を含む。西山に沈まんとする殘陽微よして、冷一点の活氣を止めず、西風淅々落葉雨の如く飛ぶ。吁嗟乎、誰れか、此際よ立ちて、寂寞伶仃の感なからん。於邑の聲なからん。圓滿健全なる家庭は、譬へば、禾穀穰々たる活野の如し、和風習々、吹いて波紋を生ず。面に觸れ、肌に合ひて快なり。譬へば、春陽の如し。野水潺湲と流るゝ處、青草、僅かに生じ、遠く見れば、視るべきも、近くは則ち無し。而も、一帶の生意、勃々然として抑ゆ可らざるものあり。曉眠、猶は覺めず、恍惚として、横臥する時、乍ち、好聲の、梅花香裡より泄れ來たるを聽く。天地は、希望を以て充たされたり。笑つて而して喜び、喜んで而して躍るもの、故なしとせんや。圓滿健全なる家庭は、如何にして、これを得べき。健全なる身体と、健全なる精神と、健全なる結合と、これなり。父母は常に健全よして、其業に從ひ、兒女い健全にして戲れ遊び、朝暮團欒して、相談り、相笑ひ、嘻々他念なし。嫉妬、邪念、睚眥、反目、慊猜、是れ、不健全なる家庭の產物なり。

若し、其れ、人間の快樂を求めば、一家繁昌して、夫婦相愛し、長幼相助け、和諧團欒情眞に、談實に、嬉々笑謔、他念なきもの、固より其一なり。稚兒、健全に發育し、老親、安靜に壽を送り、家富み、財多からずといへども、敢て、飢餓に至らず、冬は、蠶絲の輕暖に非ざるも、手織の綿袍に寒さを凌ぎ、夏は、蟬翼の涼袗に非ざるも、一襲

の麻衣よ、暑さを忘る。子としては孝を盡くし、民としては忠を致す。仰ぎて天に愧ぢず、伏して地に愧ぢず、省みて心よ愧ぢざるもの、其二なり。意氣相投じ、諍へども逆ふと莫く、利害相忘れ、緩急互に救ひ、過失相規戒し、功績互よ賞賛し、提携捧擁して、共に、其惡を去りて、其善を旌はし、他の長を擇んで、短を棄て、切瑳琢磨、功成り、名遂げたる后ち、相俱よ臂を一堂に把りて、互みに、當年の事を談り、彼我相脱して、渾然一体となり、膝と膝と面と面と、両々相接して、見て而して喜ぶもの人生行路の中に於て、豈に、最も大なる快樂に非ずや。況んや、身世不過にして坎坷潦倒、志を得ず、一朝、斷蓬となりて、各々、天の一方よ飄零し、風雨蕭々、客裡の荒眠を破る處、互よ思ひを天涯地角よ馳するおと幾回、而して、后ち、僅かに相見て語るおとを得、其感、如何ぞや。又、況んや、其死生を知らざりし者よ於いてをや。這般の心狀を盡くせるもの、岡千仞の石田梅村、及び、永井蕉子と竹廼樓に飲むの詩とあす。曰く。

匆々別后十年過　其奈人生朝露何　詩酒追隨疑夢寐　功名潦倒愧山河
交情猶雨兼今雨　世事長歌又短歌　休向公園裁榻去　五城樓破夕陽多

堤某、之を評して、超承未だ精しからずとなす。寔に、詞人情を解せざるもの一笑よ附すべし。

○我が郷に貪慾酷薄、唯だ、己れの事のみを圖る某といふ人ありけり。おほやけより命せられし民の事業の受負などして、頊細の營利に目をくばりて、民の事などは、少しも心を留めざりければ、常ふ人々の恨み怒る所となり、恥かく事共多かりき。或る時の事なりき、其は、其傭人共の勤怠を檢せむとて、己が青田を見巡りつゝありしが、折しも十二三と十五六許りなる乞丐の子供、二人用水の中にて泳ぎつゝありしが、幼かりし小供は、如何にしけん、足踏み辷らして深みに陷ゐり、遂に果敢なくなりければ、其父なる乞丐、尋ね來たりて、急ぎ、衣を脱ぎ、水よ入りて屍を求めけれども、深くして得ざりしかば、悲嘆の餘り、水中に泣き居たり。折しも、かの某は田を巡り畢りて、茲に來りけるが、此の樣を見て、乞丐にいひけるやう、汝いかに泣き居るとも死せし者の回らんやうなし　死者水中に在るもの、二十四時間を經る時は、必ず水面に浮び出づるものなれば、早く水を出づべしとて、空嘯きて言ひ放ちければ、其乞丐涙を抑へ、某に向ひて、旦那貴郎は小供を持たずや、今已れの可哀

の子が、水に溺れて沈めるを見ながら、親として、二十四時間の後を待ち得るかと問ひければ、流石の某もかゝす詞なく、ソコ〳〵に歸りさと云ふ。

日記

明治廿九年十二月より

○十二月十日に出京すべかりしを、思はぬ雨に妨げられ、今日の日の晴を幸ひ、八時頃家を出で、京に上る。六丁目に到りしに、田中三重君も出京の際よて、とも〳〵に話しながら行く。木曾根新田耕地より久左衛門新田に出づれば、蒼澤ある田能寺の住職も、東京へ行くを見たり。思ふに、此小春日和に、今迄閉ぢ込められし用事を便せんとて、出掛くるなるべし。

御獵場の棒杭高し赤とんぼ

京に行く道連もあり小六月

禁獵の制札ふりぬ百舌鳥のこゑ

機械場の煙出かすむ小春かな

○十四日八時頃、大島氏に立ち寄り、途次、故中根清美君の宅に到り、同氏臨終の模様など承る。氏の舍兄なる人と母堂とは、かたみよ、氏が不慮の永眠の、まあと〳〵は思はれずなど、哀れなる節々、鼻つまらせて、物語らる。死せる人、固より、哀れに氣の毒あるも、遺れる人の心や、更にいかよ。墓いづことへば、駒込吉祥寺なりといふ。予は、ねんごろに辞をのこして、十二時頃吉祥寺よ參り、墓に詣づれば、新らしき十墳の未だ乾かざるに掃せる樒、菊の花など、早や、已に、半ば凋みて、白張提灯の底抜けたるが、風にゆらぎてから〳〵と鳴るよも、墓中の人の何かいひたげなるにやと思はれて、哀れあり。親しき友どちのくやみの歌など、記したるが、雨にそぼちて、字のにじみたるもあはれ。墓表卒塔婆など、口れちがひて、生々しき文字をとどめつ。

中根清美之墓

墨仙院釋清美緑衣居士

嗚、九月には出京し玉へ。僕も、九月よりは大に爲すあるべし。幸に、安心し玉へ。秋雄壯の辞を作して、予を送りし君は、何事ぞ、予に先き立ちて、此冷静なる墓中の人とあり、言葉も交はし得ずして、空しく、闃然の思ひに堪へがたく、踟蹰去る能はざる予を留めんとは。予い、いふべからざる情に打たれて、獨り、物淋しく、墓中を徘

徊せしに、學德聞え高かゝりし文學博士川田剛先生の、同じく、君に先だちて此處に埋められあるを見出しぬ。老少不定、今更に悟りしもふぞまし。

夫より、徒弟請受の家用を果さんため、小石川大塚辻町に東京養育院を音づるゝ途次、東京盲啞學校の前を通りしかば、入りて參觀しぬ。可憐ある少男少女が、ゐとしはらしげに、思ふ事言ひも得せで、手まねして遊び居たるが、やがて、始業の鐘板につれて、おのがじし、卓につきて、或は、習字、圖畫、或は、裁縫などゝ從事せるさま、世のわんぱく者を想ひやるにつけても、哀れゝ、一入に深し。案内の一啞生に、いろ〳〵の事筆にて問ひなぞして、四時頃、養育院に到れば、おれは、また、異りたる哀ゲかし。捨てられし者、親を知らぬ者、貧しくて家に居りがたき者、四五十疊許りもある廣き室に、此處よ一圍、彼處に一圍、かたまり合ひて遊びゐたるが、予の入り來るを、淋しげに見送り、見迎へたる、哀れなかぎりなりき。

○十七日　玉嶋氏も、友人と約あり、上野に行かんとの事にて、同行せんの心なりしが、大矢敬香氏の、此頃また、持病の腦病再發して困しみ居らるゝよしを聞き、之れを訪はんため、予は、九段阪上富士見町なる田嶋邸に到りぬ。折よく、大矢氏在宅にて、今日は少しくよし。幸ひ、今日は神嘗祭にて、明日も、日曜にて休業なればとて共に誘ひて、上野に至り、洋畫界に於ける新派として評判高き白馬會を觀る、げに、從來の油繪に滿足せずして起れる程ありて、自然を描いて自然を超越する水彩畫(Water colour Painting)さもがに見ても、目さひる心地す。曾に、其の品題の自由にして大膽なるが故のみなら寸。其摸寫の過巧失眞の弊あきのとならず、着想の新規にして、落想の奇拔に、着色傳彩の眞に逼りたる、此派の印象派(Impressionist)の稱ある所以なり。中にも、夕日(?)を紙窓に受けたる一室ゐ、十六七許りとも見ゆる、温厚にして愛らしき口元を持てる娘の、清くさつぱり〳〵たる木綿衣着たるが紅絹の小切なぞ取り亂して、半ば縫ひ掛けて房なせる糸を、糸玉に卷き直さんとする折柄、猫の兒の之れに戯れたる樣を寫したるものと、今一つは、小高き自然の岡に樅の木、楓の木なぞ、高く太く生ひ立ちたる根本に、綠の夏草滋りたる傍らを、おれも、十六七と覺ゆる利發らしき愛嬌ある顔付しさる娘の、蝙蝠傘斜めに肩によせかけたるが、目さひる如き堅縞の單衣着て、横に、岡を過ぐるさまを描けるとありて前者の畫者い、誰れなりしか、此れは新派の代表者と聞えし黑田清輝氏の寫ける所

なり。此一双の少女に反映して人の目を引くは、五十四五とも見ゆる白髪斑々の翁風神老峭よして骨稜々たる中にやさしき風を供へたる老翁の、六畳許りの小座敷にぬぎたる着物など、うしろの屏風にかけたるが前に、胡坐かき、火鉢を擁し、うつ伏よおりて、今や起らんずる紅火を、口尖らして吹きつゝある閑散棲遑の狀を寫したる一幅と、夕桑えしたる小春空(?)よ、チョロ〳〵流れの小川、清く淺く屈曲したるあたりを、草鞋穿き、手拭しどろなく被ふりたる三十許りの、田舍女房の、何やら草苞さげて、小犬を脇に連れたるが、いそ〳〵來かゝるの一幅となりき。大矢氏ども〴〵、坐ろに、甕底の空しきをかこちぬ。さては、かゝる神趣妙味を描き出せる畫家の胸中の、いかにやさしく、哀れなることよ。大矢氏に、また、此夏鶴沼に在りし頃、七里濱の片ほとりよ、ほつたて小屋作りて、「何人も此處よいおふことを得べし」といふクリスチャン、チャリチーを示したる板ふだ掲げさる奥に、其が主人なるべし、餘念もなくヌメ張りたる板枠に、丹青を凝らしつゝありし人の事、羨ましく思ひたりしおとなど物語る。

○十一月十八日　前の田甫に散歩す。十里の耕野、草枯れ木疲せて落莫幽寂、遠くまばらなる木立の、霜に染められて、或はとび色茶褐色或は瑚珀色になりたるが、傍らに、薄青色の雜木、緑りの小笹藪など、自然よ配合の妙を顯いして、見るから、に新派の西洋畫展べたらん心地するよ、其が背景をおして、空色なせる甲駿の山々澄み渡りし碧落よ、蜿蜒と連なれる其下に當りて、藪屋根れ小家の欹斜したるが、木の間に見え隱れするなど、おか〳〵に風情多し。

午后、ヲルヅチルス詩集を繙く。夕刻、河畔に逍遙を、一天幽寂、雨にて水嵩增して、流れは強きも、さすがに冬の流れあり。薄霧、對岸の蘆洲のあたりに、一筋二筋たちたるが、夕燒したる空を醮したる中に、堤上の木立藪屋などうすぐろくうつれるさま、えも云はれず。思いず、向ふを見れば、暮色を帶びたる富岳、半ば落葉せし高き木立の間に見えたる、いと氣高し。夜の料よもや、打つ藪の音、あちおちに起り、川面に響きてきこゆ。

君を想ふの情、いよゝ殷にして、而も、筆を援つて、一辞をも爲す能はず、ふりにし君が書翰をくりかへせど、音容生きませるが如し、あはれ、いつまでも友垣結ぶ片見艸の、たゞ何となう、うちも、をかれで、

明治廿九年九月廿五日

書翰の一

(前畧)精神の平和を得ると肝要と存じ候。而して、精神の平和わ、我々凡夫あつていまづ精神の平和を援攪すべき事務に携はらざるおと、消極的の方法に候。其の進んで、宇宙の眞を觀じ、美を觀じ、善を觀じて、それと同化し、融合し、合体するは、申す迄もなく、積極的手段として、我等が當に努むべき所には候へども、今は、其の方法を研究するとも許されざる身の上、止むなく、小生は我を虚うし、氣を平かにして、以て、自然の妙音を聞き得るの下地をつくるの外無しと存じ、聞く所の小乗的に、物をふるるにつけて、簇り來る感想の由來、性質、狀態など研究、いま、靜觀せん工夫を案じ居候。されば、六ヶしき學問上の理屈抔わ、殆んど全く、打忘れたる如く、別に、心にも浮べて考へんとも不致候。いな、考ふる氣根勢力無之候が爲め、むしろ、詩歌的よ、平俗的に、自然の妙

諦に到達せんとを心に期して、(極めておぼろなごら)只今は、むしろ茫然として、何の爲すところもなく無我の境に入らんと心がけ居候。(畧)且つ、近來、一種の(例の)反抗的感概は、倍々、件の積極的手段を擇ぶを禁せしめ候。手段や、固より可、大に可なるも、其の、つひに實を握り居るや否やの疑問、頻りと解答を試み來候爲めふ、性急にして、速領しやすき小生の心は、其の此の手段によれる人士の、多く、似而非開悟者の如き風あるを見るを嫌ふの餘り、併せて、此の手段をも、一邊に押しやらんと致し候はどに、反抗の念に強ひられ候事、退いて考ふれば、自家の確信なき事、依據なき事を、白狀致し候わけなれども、實際なれば致方も無之候。勿論、心の奥底よは、此の方法をよみし、あくまで、之れを依らざるべからざるを主張致し候へども、所謂小我(?)の、之れを拒否するが爲めに、かくは、迷ひ居候。うち明けて申上候へば、從來より萌しつゝあり し此の反抗的精神の火の手は、今や、熾盛を極め居候。換言すれば、眞地面の人と見えざる小生の苦痛は、時として、病苦よりも強く候事も有之、中夜、煩悶展轉する事も有之候。現今の社會、其の、文學上と、社會上と、政治上と、はた、學者といはず、詩人といはず、實業家といはず、いづれの社會に徵するも、一種いとふべき煤烟の如き臭氣の芽々、鼻をつき來るに不堪候。いかに、十九世紀は自覺心の強大なる世とはいへ、熱誠燃ゆるが如く、無我として自然なると、かの小噴火口位の如き人の、殆んど一人の小生の目よすべきものなきは、遺憾に候はずや。少おくとも、我等の如き未經驗者、妄進者、不覺者を收容し、訓諭し指導ー懷抱するが如き者のある由を見聞せざるに、遺憾には候はずや。少なくとも、大陸的氣象を抱いて、寛宏悠揚、さながら、春風の吹くが如き一の君士をすら見る能はざるは遺憾に候はずや。小生は、此点よがいて、かの南洲翁を慕ひ申候。ワシントンを慕ひ申候。(キリストと、釋迦と、其他の諸聖とを、素々、我等衆生の表たるべきも、生い、殆んど、之れを知らず、知るといへども、餘りに大にして、まづ山に上らずして、直ちに天に上るを試みるが如き氣味致し候へば、そばらく、論外におく)聞くが如くんば、小生は、今にして、かの新渴襄氏に、一たび見えざりしと殘念と存じ候。當年の社會は、何ぞ、小巧、慧智、傲慢、我執、鄙劣を代表する現象の多々よして、光風霽月欽すべき高風を見ること、の

少おく候ぞ。鶏鶩の如く、實躬の現象のと、先哲のいひ古るし〜さび切れを服膺したれゞとて、ぢきに、物識りらしき口を尖らすなど、見るも淺間しく候。まして、其他の社會ハ、御推察可被下候。嗚呼、莊嚴なる造化ハ、此等輕佻浮華の徒を、何故に、懾伏せしめざるか、不思議に候。されバ、小生は、今、我が力のはぞをも忘れて、奮起せんの思ひに、不甲斐なき今日の身をもがくことも有之候。此の故に、同志の士の、益々發□して、根據を、固く、廣くせんことを願ひ、磐根錯節をまちて、其の快刀の利を社會に示す日の、一日も速からむことを切望致し候。小生の如きは、進んで、此大任に當るの志ハ無之おあらず候へども、退ハて路傍一点の野花となり、倦遊歸栖の士が、行く〜〜馬上の眺めとおるを得、其がせめてもの慰籍となるを得ば、また、敢て、自ら滿足可致候。但し、勿論、世に生れ出でし以上は、其の力の限りを盡くすは、人間の義務と存じ候へば(略)小生ハ、今や、以上申上候如き世潮を浴び候故か、かへり見て、自ら万物につけて眞心より云爲するとおきが如くなれる危險に陷り候。明言すれば、万事深く意にせざる行當り主義、放任主義になれる事ゝ候。例へば、悲しむべき事ゝ接しても、一時、それに中心よりも感動するも、直ちに冷却するが如き傾向有之候事に候。繼子のひがみ根性よりして、善き事、爲めになるとも、邪推致し候樣に相成候事に候。(略)今は、反□の見込なきまでに、根深く相成居り、時に、乍我呆れ候事も數々ゝ御座候。Selbstsucht の第一着は、まづ、此よりはじむべくと存じ居候。(略)兎に角、小生の心狀は、反抗的觀念の高潮ゝ壓倒せられて、消極の方面に身を寄せ居候へども、心の奥底には、斷じて、之れを拒むもの有之、眇たる此一身を犧牲として、此浮華なる潮流に立たんの意氣、(未だ決心といふに至らず)、鬱勃致し居り候。されば、此意氣を鼓舞し、推奬して、拔くべからざる根柢を與へ、防ぐべからざる勢力を得來ると、正に、小生の力むべき一大責任と覺悟致し居候。朝河氏がいはゆるVanitiの厚皮を剝ぎ行くとも、之れが道筋に於ける一事實と存じ候。小生が胸中は、以上申述候通りに候。(下略)

明治三十年三月一日

書翰の二

(前略)自ら思ふに、元來思索的頭腦にあらず、且つ、他動的人物に有之候へば、敬虔崇高なることなどハ、思ひ浮かばず、兎角ゝ、外形ゝ事ゝ心奪はれて、言は

ば宗教的消息にハ、未だ接せずと可申、隨つてハ之ニ向て、勇前精進する底の決心も起らず、只だ、漠然と、從來の思想の習慣に依て、云爲致し居る事ニ候。(零)げに、信仰なきものほど、憐れなるは無しと、自家の實驗に徴して感じ申候。小生は、只今、内部の欠乏を感ずること甚だしく候。換言すれば、靈性の飢渴ニ迫り居候。されば、先頃とちがひ、反抗的勇氣も無之、眞ニ空々寂々ニ御座候。抑も、如何ニせば、かゝる病は治すべく候や。御教示可被下候。顧ふに、有間敷雜念ニ滿たされ候がためか。勿論、時々、天地人生を靜觀致し候へば、一種の犯すべからざる莊重なるものあるを感じ候へども、之れを以て、未だ、神の示現とまでハ思ひ到らず、只、何となく、ある感じ候のみに候。兄が所謂神とは、いふ所凡神的の神に候や、暖かなるPersonal Godニ候や。宇宙に、至大至高の大靈の存在する事丈は、おぼろに感得致居候へども、又、社會が之れに向てrhythmic movementをなして、徐々と進歩しつゝあることも、略ぼ、了解致居候へども、此等の考へハ、極めて漠然たるものにして、小生が心を動かすほど明らかなるものにハ無之候。小生が今日の安心ハ、いはば儒教的の安心にして、極めて力なきものに候。即ち、死生有命、富貴在天といふ底のものニ候て、獨り自ら善くすれば足る消極的のものに候。一言ニて申せば、火もなく、熱もなく、冷々淡々たるもの、小生が昨今の心狀ニ御座候。或時ニ、迚も、自分にてハ安心は得られざれば、他の世人の如く、或外物によりても、安心したしと思ふほども有之候はどに候。なまなか、理屈をきゝしこと殘念のやうの、氣持も致候。乃ち、自家の薄志弱行なるに呆れ申候事、ときゝに候 零)處世の方針についても、極めて漠然たるものに候。但し、ねぼろながら、是迄懷抱致し居候希望を申せば、廣義にいふ教育、及び、社會の改良に從事したき考に御座候。最も、これは、自己の準備必要にいへば、オイソレといふわけには不參候。前述の如き心狀にては、自分が先づ教育せられ候必要有之候へば、尚ほ〳〵遠き事に候。夫れは兎もあれ、現社會の實勢を觀察致し候に、功利的勢力熾んにして、非倫不道は、跳梁を逞しうしつゝ有之、いかなる、心外千萬に存じ候。宗教上、社會上、あらゆる者に於いて、改善すべき事不少、男兒宜しく奮發すべきの秋と存じ候につけても、乍不及一臂の力を

効したく、諸兄が提撕を待つの必要、いよ〳〵深く相感じ申候。
小生よゝ、どうしても、文學的の事は出來ずと存じ候。思索考究の事業は、尚更と存じ候。されば、早く或る確信を得て、一歩にても、其の方に盡力するかた、小生が天職と存じ候。如何に候や。好し、おぼろなごらも、天地人生の歸趨を認め候からには、飽くまでも、之れに向て勇進し、正義の爲めに斃れさき希望に御座候。翻つて思ふに、信仰といひ、安心といふもの、只々、考ふる而已にては決して、堅牢なるものに無之、着々實行履踐して、之れを確かめ、之れを實行しておそ、始めて。活きたる信仰安心と相成候やうお感じ候。孟子の所謂、道者在邇といふもの、蓋し、また、此意に外ならざるべく、古の聖賢が、孜々として力めたるも、全く、之れが爲めなるべく、佛者が戒行を口するも、之れが爲めと存じ候。小生は、是迄、我がまゝなる感情に任せて、云爲し來り候爲め、理性の許し〳〵道理も、極めて力弱くおりーやうに感じ申候。今更、申すも愚なれども、實行に伴はぬ信仰の、つひに無力と相成るやうに確信致し候。(畧)深遠なる思索家、豫言者たらずとも、眞面目なる道德家となるを得て、伏仰天地に恥づるなきを得ば、本懷に御座候。小生い、決して、自ら猫らざるものには無之、敢て、野心は抱かず候。早く、矛盾せざる我を見出したく候。古聖賢が、一世の思潮をまきかへさんとして鞠躬努力せる行動の、いかよ勇ましく美しきか、これを思ひて、悚然として自己の怠慢を恐れ申候。及ばずといへども、庶くは勉めたき決心よ候(下略)

打ちかべし、また、打ちかへせば、哀れ、君がまことの姿を、これほど美しう圓かよ、うつし出でたる繪姿の、またあるべしや。

ゆめさめて君懷ふ月の夜半かな　　辱知　綱嶋榮一郎

○

嗚呼澁谷劉君

○君の病みたまひし時送れる歌

花ゐ醉ひ、月に醉ひて、
嗚呼、君は病みませり。
酒さめて、夢さめて、
癒へよとのみをいのるかな。

月なき夜半の夢いかよ、
いたくな吹きそ窓の風。

○轉地療養の爲將に京を去らんとし給へる時送れる歌

暮れ行く春を尋ぬてか、
都をすて〻君は今、
はるか涙路をわけて行く。
とゐろ定めぬ草枕、
野邊の小草の招くとも、
都の夢と追へよたゞ。
ちさとの外よ君行くも
雲のはれたる宵々は、
共に眺めむ空の月。

○房州よ居給へる時君の境を思ひ君に代りて作れる歌

天地の、
秘密をひらく、
思ひはるけく、
いつしか我も、
人の世の
罪はも深き、
ひとり渚を、
煩惱いかよ、
よせ來ていい、
またうちかへす、
下界の影は、
まぼかなるかな、
白雲を、
眺むれば、
空高く。
涙のいろ、
さまよへば、
潮湧く。
涙の上に、
くだけても、
空の月。

厚知　坂田文治

○

在しゝ時は、ありのすさびに、行末長く契り得ぬべき心地して、屢々音づれまつる

ざりしことの口惜しく、「かゝらひにい」、「幸くまさば」と、悔恨の情むらがり起こるまゝに、文筐ひきよせて、其のかみ寄せ給ひし玉章を繰りひろぐれば、世よ、もぬけて、氣高く優しき御姿の、さながらに思ひ浮かべふるゝを、己れのみはと惜らしみて、君が遺稿のはしに添へぬ。

君が一週忌の日の夕ぐれに　五十嵐力しるす

もやかゝる夕暮うれしなき君の
きりのまがひゐ訪ひも來るかと

（明治廿九年八月二日大洗より）

書翰第一

（前略）外美内醜の忌はしき現象は、十九世紀の特產にも無之候はんが、更に角如何なる方面よ於ても、此の現象を見ざるを得ずとい、慨すべき至りと存候。殊に、此のせゝこまゝき嗚人國の現在社會ほど、件の現象の著るきは無之やう見受け申し候。學者物識などいふからは、定めて、公平寛容、自然の懷ろにも劣らざる者と存居候處、皆々案外よて、支那詩人の口吻を眞似るにいあらねど、寧ろ、漁翁一竿の生活こそ望ましくと存ぜられ候僞善、虛僞、形式、不信、輕浮、倨傲、向不見、木葉天狗等、是等種々なる產物を輸出せんにと、隨分横濱ゝ波止場より輸入し來たる舶來品も不少樣に候が、現今の貿易に反し、確に輸出の超過無相違と存候。かゝる一種の臭氣は、隅から隅まで、行きわたり居り候へば、魚市に在る者、其の身の臭きを知らざると同じき者のミの社會と申しても、强ち酷評にもあらざる今の世の中、何かにつけ、不平の多きも餘儀なきことに御座候。是れが世の生活てふものゝ眞相かと思へば、誠よ、果敢なくも感ぜられ候へども、小生は、到底、此の如き生活には堪へ得ず候。されバとて、固より、之を動かして改善の道に導くなどい、思ひもよらざる事に候へば、先づ、自家を潔うして、俯仰不耻天地やう致す外無之と存候。但、小生の平生獨り悲しみ居るn、己れも亦、不知不識其の御仲間入して笑はるゝ眞似を爲しつゝあることに候。よし、是れは、力めて自覺して取去るとするも、一人にても二人にても宜しきにつき、一番此の虛△なる精神を翻して正しき人間になして見ん。否、人よりも先づ自家を訓練せひとする中心止み難き大動機さへ無之程にまで感染致居候事に御座候。是れい、小生が今日の心狀を腹藏なく申上げ候ものゝて、只

々、僅に、古聖人の遺訓、乃至は、見聞せし正義道德の、幸に、念頭にかゝり居り候爲め、今日の有樣を維持致候にて、此のまゝにて進めば、積極的に惡事をも働くまじきも、決して、今日より優りたる人とは成り得まじきかと自ら反省して呆れ居り候。實に、小生は、人間は一派の人々の主張するが如く私利を貪る淺ましき動物にとあらざるかといふ感を起こし候事、一再のみには無之候。思へば基督や釋迦は、どうしても、人間の子とは見えず候。兎に角、現在社會の狀態も氣にくはず、さらば、別に住むべき理想界ありやといふに、朦朧雲の如きを奈何せん。誠に耻かしき事には候へども、小生が逡巡して中有にさまよひ居り候は、實に、此の決斷のつかざる爲めに候。良心は、我に向つて進めと命じ候へども、是れも、世間の御つき合の爲めに命ぜられ候心地致し、乍我、判斷に迷ひ居候。御考は如何に候や、（中略）當地（大洗）の天然は先使よも申上候通り、壯大魁奇、洵に、吾輩托興の地に恰當致候へども、今よなりて、善く〳〵觀察致し候へば、いやよ成り申候。其い、此の幽僻の地の粉華奢侈い巷となりつゝあるが爲めよ候。東京はいふに及ばず、水戸及び近縣の八字連、毎日入り代り立ちかはり。入り來たりて殺風景の酒宴に、絶えず大騒動致し、折角養はんとする幽情を攪破致候。……彼等が、いかよ肉慾の生活をもればとて、餘りと思へば道德、宗教の力も、如何はしく思はれ、又、今日の世の中よ、せめてい、此の輩をして、時に人間歸趨の道なりとも回想反省せしめ、其の歡樂の最中にも恐怖のまたゝき位いなさしむべき人物あきかと思へば、何となく、味氣なく頼み少なき世の中のやうに感せられ候（後略）

（明治廿九年九月念七郷里より）

書翰第二

（前略）但だ、一個の人として望ミ度きは、坦懷虛心に候。小巧細慧、獨り得意とするが如きは、君子の取らざる所と存候。併し、是れも先天的嗚國根性なりといゝ致方無之候。日本現今の社會は、洵に、ふ利巧運の社會に候。文學も、政治も、法律も、經濟も、はた、實業界も、虛靈界も。浩漠大息、思とず之が爲めに發し申候。拙鄕、京地を距る僅に四里、千住より綾瀬川に傍うて板戸に到り、ろれより一里東よ入れば中川の流に出づ。一葦に棹せば、蘆廬よ可達候。半日の清閑を得て、輕屐、枯黎、郊外、破村の秋色を探るも、亦、無妙よしもあらずと存

候。(後略)

書翰第三　　(明治三十年二月廿八日郷里より)

(前略)出門何所見、春色滿平蕪。高陽の一酒徒には無之候へども、知己は扨おき殆んど一人の話相手もなき誠よ嘆ずべき今日の位地に有之候事とて、同人諸子の事思ひ出ださぬ日とてはなきにもかゝわらず、いつもながらの筆不性、春倦と病懶とにつれて、一入の此の御無沙汰を致申候。尤も一つは、精神的ある友誼の、氣のすゝまぬにも拘わらず、故らめきたる形式的の挨拶を爲すの必要も無かるべしとの考、心底に有之候にも因り候。

小生も、近來、餘ほど肉つき氣分もすぐれ候間、先づ御安心可被下候。但だ、小生が諸兄よ對して、最も面目なき一事わ、精神的生活の飢饉に迫り居り候事に候。簡略よ申せば、熱もる所あるよもあらざれば、敢て、冷かなるよもあらず。前途の光明を認め得たるにもあらねば、向上的勇氣も無之……はゝゝ、リテラリーに、空々寂々に御座候。私に思ふに、此のまゝにしてゆかば、一般の世人の如く、生きて而して死する丈のこと外、何も出來ずと存候。さるにても恐ろしきは四圍の感化に候。若し、詩的に蕭散閑雅の田舍など申せば、如何にもよきやうに聞こゆれども、苦闘もなく、煩悶もなき呑氣な田舍生活に慣れ候へば、いつしか氣もさかなりて、無精神の一肉團たる我を見出し候事に候て、他の動植物と一般、食つて肥ゆるのみの事よ候。されば、時々、諸兄の警笞にあうて悚然として猛省致し、ゆるみかけし惰心に鞭ち度存候。先頃までは、妙にえゝがり居り候ひしが、此の頃わ、また、妙に自らくだしたく、何の價値なき者のやうな氣持のみ致し、此の駑駘は、いかに鞭つも、馳騁の任に堪へずとやうに、我れわれを卑しめ候。これといふも、畢竟は、他動的の人物なるに加へて、理想もなく生命もなきが爲めと存じ候。よし、細くとも、源泉よして涸れずば、流は盡きざるべく候へども、元來、理想の泉を持たず、唯だ外緣にひかれて、本能的よ云爲し來たれることに候へば、今更、之れを歎ずるにも及ばず候へども、此の一事いかよも、顧みて、自家の本領の貧しきを感じ、情けなく存じ候。△△氏は明らかに神の存在を認め、之れを念じ之れを景仰するの淨樂に充たされつゝありとの事よ候ひしが、小生わ、恥かしく候へども、未だ暖かなる神の存在わ、扨

おき、まだ〳〵深き懐疑の雲に蔽れ居り、生命の不充實を感ずること深く候。如何にも恥かしき白狀に候へども、小生は未だ、宗教的消息に接せず候。若し強ひていはゞ、只、何となく、漠然天地人生の莊嚴なる趣の片影ほか見居らずと申すべきのみ、神と瞑合し、默會し、理想を燃やして向上的精神の破碎たるが如きは極めて遼遠の事と自ら歎じ居候。(略)

今更申す迄もなけれど、いつも感じ候は、極まつてしまはぬことが必要といふ事に候。例へば、我は、社會改良論者なりというて、何事も之れに引きつける如きことあるべからず、發句師の發句、講釋師の講釋、誠にきまり過ぎて面白からず、△△謂はゆる「學者らしからざる學者」とやうよ、凡てゆきたくと存候。

我は道德家なり、宗教家なりというて、いつも滋面づくるやうなせゝこましさに陷りたかぶぬものと存候。即ち、融通拋却、我を沒したる無我を養ひたくなど思ひ居り候。(後略)

書翰第四　(明治三十年三月十七日郷里より)

(前略)……の說、寔に人意を强う致候事と存候。就中、方に咫尺の消息を知るに止まる手足皮膚たらずして、百里の遠きを看る眼たらむと心掛くること必要云々、紳に書すべき警語と存候。春陽堂の大家肯像に富山の賣藥効能的賛辭を辱うして、私よ大得意となるが如き諸先生も不拘と存せられ候が、兎に角、奉られて誰れもいやがることなき人の弱点よつけ入りて自家の懷ろを肥やさむとする春陽堂も、なか〳〵拔目なしと可申候。……古の人は、棺を蓋いざれば、自家の著述などを、公然、自分からひけらかすほどの膽略も無之やうに記臆致候が、時勢の變遷やら、活版れ便利やらとは申せ、又、一つよは、社會が繁雜になりて他人の物などは、誰れも搆つて呉れぬから、自分で拵へたり生んだりするが一番と思ひつきしもれか。誰れも彼れも△△△△△片々たる自著の出版に忙はしき樣子、扨ても御手輕れ世の中とは相成候事よと、毎々、例の保守的感慨催され候。私に思ふに、かくするが所謂生存競爭なるもの歟。かくせねば迚も此の活社會にと立ち難きもの歟。それにしては餘り難有からぬ世の中と思はれ申候。退いて考ふるに、全く然るべからず、永遠なる將來ころ念頭に置くべきものなれと存候。小生も、常に、「百年の後」を考ふること必要と存

居候。…嗚呼百年の後、考ひ來されば甚憂交々相發し候。永遠なる希望、目的、生活、及ばずと雖も、庶幾くゝ努めん哉。

何か或る物を得て活動の△△をさかんにしたく、どことなく慊焉たるやうの感致候へども、どういふものか、意の如くならず候。神といふもの、どうしても考へられず候。只今もRationalistは云々の御言、如何にも御同感に候「蜻蛉や飛び直しても元の枝」、いくら考へ直しても元の考ばか浮かばず、或る時は、我れは停止せるよ非ずやとも思はれ、寸毫のえらがりも無之相成申候。たゞ、我れ未だ其の機に到達せざるなふんなど、獨り慰め居候若しさ御察し下され度候。

近詠左よ。御笑正下され度候。

閑樂

納租尚餘租、　有客翻青蔬。　梢柮滿爐火。　兒女讀圖書。

花信

春雨河水解、　春風山雪消。　江東花信近、　日影鳥聲驕。

春寒

溪邊梅發日、　江畔草然時。　聚寒漑如水、　吟遊阻客思。

天地

烟霞改朝夕、　開落自春秋。　更有人間世、　荒枯一夢幽。

節分

里閭存舊俗、　撒豆祈佳祥。　偏愛野人志、　思無邪自芳。

愛

三日不相遇、　如經三月間。　春來思君疲、　握手覩紅顏。

自らを清くし、貧しくし、卑しくゝ、空しくしてひたぶるに、向上の一路にあこがれ給ふ。形見の書翰にうつれる君が生涯の、尊とく美はしき哉。われは、理想よ體達し給ひたらむ君ゐ於てよりも、體達せむとして悶へ給へる君の心ばせに於て、なかゝに限りき尊さを見るなり。心の貧しかりし君、哀しめる君、柔和なりし君、飢ゑ渴く如く義を慕へる君、矜恤ありし君、心の清き君、和平を求めし君、義ことの爲めよ自ら責めし君は、疑もなく福なるべし。久しく求め給ひし榮光、あはれ、君が靈の

上にあれ。

心の清き人は、譬へゞ、夜光の玉の如し。故らに働くことなしとも、其の尊き光は、世の闇を破りて、眩ゆく四方を照らさむ。君よして在さゞ、よしや、一竿の風月に老い給ふとも、君知れらむ限りは、君の心ばせを見て、人道の爲めに意を強くすべく、惰夫兇漢も、君の行爲を見て襟を正すべからむを。はかなしや、昨夢已よ追ふべからずなりぬ。

君曾て志を述べて曰はれき。「願はくハ、かの正直の汗に濡るゝ平和ある平民と浮沈を同じうせむ」と。又曰はれき。「我が力、よく、他の不知迷誤の人を導くことを得むか。鄉愿を感爭する一村の小中江藤樹となる。我が理想は實現せられたるに庶幾し」と。人生其の天分を盡くさずして、生を終ふるより悲しむべきなし。君の如きハ、實に、其の一なり。多く言はしむるなかれ。われは、實に君の靈を慰むべき一の辭を有せず。われの君に捧ぐるもの、おはれ、唯だ涙あるのみ。

慰めむことばも知らず君おもへば
絶えずもおつる涙のみして

厚知　五十嵐　力

澁谷鴻南遺稿終

明治三十四年四月十八日印刷
明治三十四年四月廿二日發行

非賣品

編輯者　東京市麹町區下六番町六番地　五十嵐力

發行者　埼玉縣北葛飾郡彦成村大字彦江三十八番地　澁谷瀏實父　鈴木源次郎

印刷者　東京市下谷區御徒町一丁目七番地　山田仙藏

印刷所　東京市下谷區御徒町一丁目七番地　大山活版所

誤正

頁	行	誤	正
十二	十	雲のたゝずまひ	雲のたゝずまひ
十三	一	流水痩せて	流れ痩せて
十七	九	知已	知己
二三	三	ナルヅヲルス	ナルヅヲルス
三五	十	きこえげり	きこえけり
三七	十	いとも永き春	いとも永きを
三七	十三	暗	闇
五十	六	氣氛	氣氛
五十	九	藤	顧
五十一	五	複	復
五十一	八	胡琴寄、語也上	胡琴、寄語世上
五十五	二	呼嗚	嗚呼
五十六	四	花徑金を露はして釵、	花徑金釵を露はして、
五十六	四	三公	王公
五十六	十四	燈臺のし	燈臺の
五十七	十四	Aut.....Schoo.	Art.....School.

五十八	九	爾として	△爾として、
六十五	十一	わしやまた	わ！やまだ
七十	十	れ誰か道ふ	誰れか道ふ
七十二	十三	人き或ば	き或は
七十二	十三	敢て問ふ	敢て問ふ人
七十三	十四	エマルツン	ニマルツン
七十四	十四	けしきたつほどこそあれをうしも	けしきだつほどこそあれをりしも
七十六	四	爾は爾と	吾は爾と
七十六	十一	見されば	見たれば
七十六	十四	悲しき哉	悲しきは
七十七	三	十一月作日	十一月一日作
八十三	一	難火災	盗難火災
八十四	一	江の霞	紅の霞
八十五	七	佛敎の何たる	佛敎の如何ぞる
八十五	十三	非らざれバ	非ざれバ
八十九	二	疾親	疾視
八十九	八	地藏の神	地藏の袖
八十九	九	小兒はゝ無邪氣	小兒は、無邪氣

九十	二	出そうる	〃	出そうる。
九十	十	溺るゝそ	〃	溺るゝそ。
九十五	六	其は	〃	其は。
九十九	六	Impressionist	〃	Impressionist.
百三	三	をかれで	〃	ゝかれで。
百五	九	キリスト	〃	キリスト。
百六	六	盤根	〃	盤根
百七	三	時に、	〃	時は、
百七	四	Aelf-elfut	〃	Self-culture.
百七	十	Vanif	〃	Vanity.
百八	四	欠之	〃	缺之。
百八	十	暖かなる	〃	温かなる
百八	十一	rhghmic movement	〃	rhgthmic movement.
百九	七	畧)	〃	(畧)
百十三	七	煩腦	〃	煩惱。
百十一	八	記憶	〃	記憶。
百十二	五	只今もRationalirt云々	〃	只今はRationalirt云々
百十三	十一	限りある等	〃	限りなる等